

植 物 園 北 遺 跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇〇七―一

植物園北遺跡

2007 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

植 物 園 北 遺 跡

2007 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび施設建設工事に伴う植物園北遺跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気付きのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

平成 19 年 6 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

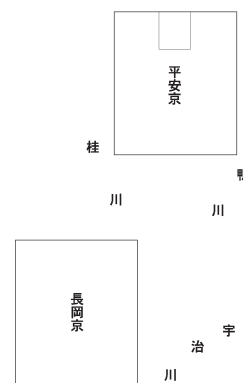
所 長 川 上 貢

例 言

- | | |
|----------|--|
| 1 遺 跡 名 | 植物園北遺跡 |
| 2 調査所在地 | 京都市左京区下鴨北野々神町 20 番地 |
| 3 委 託 者 | 京都市 代表者 京都市長 榎本頼兼 |
| 4 調査期間 | 2007 年 1 月 24 日～2007 年 4 月 27 日 |
| 5 調査面積 | 1,470 m ² |
| 6 調査担当者 | 平田 泰・モンペティ恭代 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2,500）「西賀茂」「幡枝」「鷹峯」「植物園」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用基準点 | 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。 |
| 11 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 12 遺構番号 | 遺構ごとに番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 13 遺物番号 | 通し番号を付し、写真番号も同一とした。 |
| 14 掲載写真 | 村井伸也・幸明綾子 |
| 15 遺物復元 | 村上 勉・出水みゆき |
| 16 基準点測量 | 宮原健吾 |
| 17 本書作成 | 平田 泰・モンペティ恭代 |
| 18 執筆分担 | 3－(3) 石製品をモンペティ恭代が、他を平田が執筆した。 |
| 19 編集・調整 | 中村 敦・児玉光世・山口 眞・ 吉本健吾 |



●調査地



(調査地点図)

0 2 4K

目 次

| | |
|-----------|----|
| 1. 調査経過 | 1 |
| (1) 調査の経緯 | 1 |
| (2) 位置と環境 | 2 |
| (3) 既往の調査 | 3 |
| 2. 遺 構 | 12 |
| (1) 基本層序 | 12 |
| (2) 検出遺構 | 14 |
| 3. 遺 物 | 19 |
| (1) 遺物の概要 | 19 |
| (2) 土器類 | 19 |
| (3) 石製品 | 23 |
| 4. ま と め | 25 |

図 版 目 次

| | | |
|-----|----|----------------|
| 図版1 | 遺構 | 1 全景（北西から） |
| | | 2 竪穴住居1（北から） |
| 図版2 | 遺構 | 1 竪穴住居5（西から） |
| | | 2 竪穴住居6（北西から） |
| 図版3 | 遺構 | 1 竪穴住居7（北から） |
| | | 2 竪穴住居1～4（東から） |
| 図版4 | 遺物 | 出土遺物 |

挿 図 目 次

| | | |
|-----|-------------------|----|
| 図1 | 調査位置図（1：2,500） | 1 |
| 図2 | 調査前全景（西から） | 2 |
| 図3 | 作業風景（北から） | 2 |
| 図4 | 調査区配置図（1：1,000） | 2 |
| 図5 | 既往調査位置図（1：10,000） | 5 |
| 図6 | 基本層序柱状図（1：40） | 12 |
| 図7 | 遺構平面図（1：250） | 13 |
| 図8 | 竪穴住居1・2実測図（1：80） | 14 |
| 図9 | 竪穴住居5・6実測図（1：80） | 15 |
| 図10 | 竪穴住居7実測図（1：80） | 16 |
| 図11 | 土坑3・4実測図（1：40） | 17 |
| 図12 | 土坑6実測図（1：40） | 18 |
| 図13 | 土器実測図1（1：4） | 19 |
| 図14 | 土器実測図2（1：4） | 20 |
| 図15 | 土器実測図3（1：4） | 21 |
| 図16 | 土器実測図4（1：4） | 22 |
| 図17 | 土器実測図5（1：4） | 23 |
| 図18 | 石匙実測図（1：2） | 23 |
| 図19 | 石匙 | 23 |

表 目 次

| | | |
|----|-------------|----|
| 表1 | 既往調査出土土器一覧表 | 10 |
| 表2 | 遺構概要表 | 18 |
| 表3 | 遺物概要表 | 24 |
| 表4 | 掲載遺物一覧表 | 26 |

植物園北遺跡

1. 調査経過

(1) 調査の経過

京都市左京区下鴨野々神町 20 番地の約 3,400 m²の敷地に、京都市保険福祉局保険福祉部障害企画課が京都市ふれあいセンター（仮称）の建設を計画した。敷地一帯は植物園北遺跡範囲の南東地区に含まれ、過去の周辺調査でも竪穴住居を始めとした遺構・遺物が検出されるなどの重要な調査成果が得られている。このため、京都市文化財保護課は建物建設予定範囲約 1,470 m²についての埋蔵文化財の発掘調査の必要を指導され、障害企画課が発掘調査を財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託、これを受けた研究所が発掘調査を実施する運びとなった。

調査は 2007 年 1 月 29 日から機械力による盛土層の除去作業から開始し、2 月 5 日に機械掘削を終了、以後人力による攪乱土層の除去作業、遺構の検出作業に入り、2 月 28 日までに遺構の概要を把握し、遺構の調査に入った。4 月 6 日までに竪穴住居 9 棟、土坑 7 基、溝 1 条の調査を完了し、全景・個別写真を撮影、記録、補足作業の後、4 月 23 日から調査区の埋め戻し作業に入り、器材の撤収を経て、4 月 27 日にすべての作業を終了した。



図1 調査位置図 (1 : 2,500)



図2 調査前全景（西から）

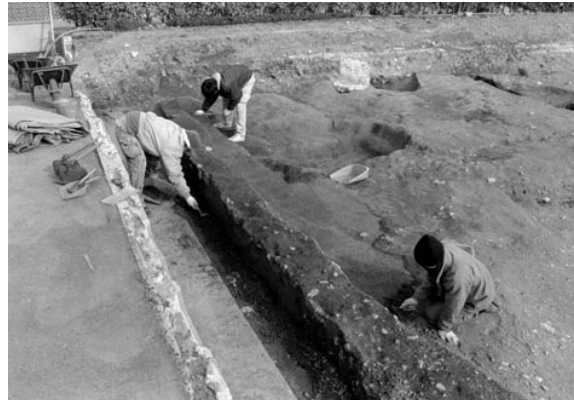


図3 作業風景（北から）

調査中の4月14日には地元向け遺跡見学会、4月19日には近隣のノートルダム学院小学生、京都大学博物館実習生などの遺跡見学会を開催し、微力ながら普及啓発の一端を担った。

（2）位置と環境

植物園北遺跡は賀茂川と高野川に挟まれた、上賀茂神社付近を北西端とした北区上賀茂の南部地域、北は神宮山・本山・深泥池・西山に接し、東は左京区松ヶ崎の西半部、南は左京区下鴨の北半の範囲に位置する。一帯は神山付近を頂点にした賀茂川の扇状地で、新生代第四紀更新世（洪積世）の終り、3万年から4万年前までに堆積した、厚い礫質砂層からなった北西から南東に緩やかに傾斜を持つ平地となっている。完新世（沖積世）である約1万年前とされる最終氷期極相から、温暖期が始まるいわゆる縄文海進までには扇状地上に小河川や自然堤防による砂層や粘土層の堆積が筋状に発達し、植物園北遺跡を構成する主要な遺構はこれをベースに成立している。

植物園北遺跡で現在までに確認されている遺跡の時期は、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、

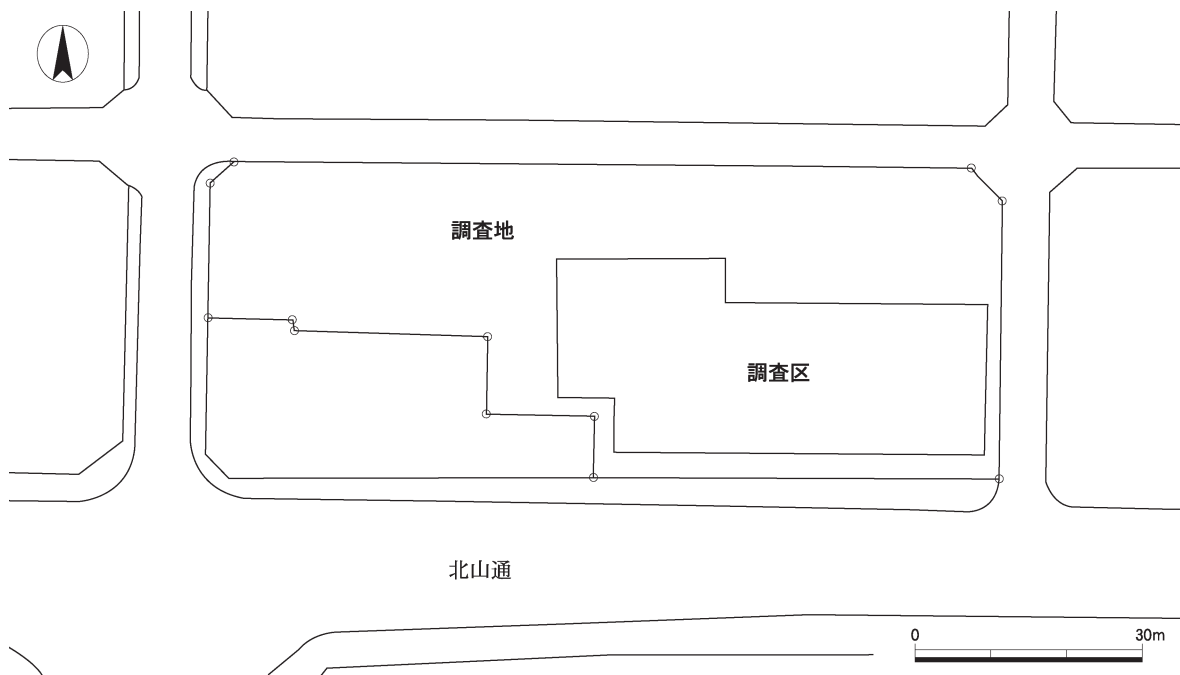


図4 調査区配置図（1：1,000）

古墳時代、飛鳥時代、奈良時代、平安時代、室町時代、江戸時代のものがある。遺構には竪穴住居、掘立柱建物、土器棺墓、溝、土坑などがあり、遺物は石器類、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、須恵質陶器、土師質土器、瓦器、瓦質土器、陶器、磁器、瓦などが出土している。

周辺の旧石器時代の遺跡は、遺跡北側の丘陵斜面で木葉状尖頭器が採集された上賀茂本山遺跡、ケシ山山頂でナイフ形石器が発見されたケシ山遺跡がある。縄文時代の遺跡は神山の麓、賀茂川東岸の河岸段丘にある上賀茂中山町遺跡で石鏃が発見された。縄文時代後期の土器が採集された上賀茂神社の北側には上賀茂遺跡があり、高野川の左岸、修学院の丘陵斜面で早期の押型文土器が発見された修学院遺跡、縄文時代後期から晩期の土坑・土器が出土した沖殿町遺跡、縄文時代後期後半の土坑・土器が出土した一乗寺向畑町遺跡、やや離れた高野川東岸の北白川一帯には縄文時代前期から後期・晩期に至る上終町遺跡、小倉町別当町遺跡、京都大学北部構内遺跡がある。縄文時代晩期から弥生時代前期の遺跡は、京都大学北部構内遺跡、京都大学本部構内遺跡、京都大学総合人間学部構内遺跡や、賀茂川西岸、上京区内膳町にある内膳町遺跡、植物園北遺跡内の植物園北側から西側にかけての地区で発見されている。弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡は植物園北遺跡と左京区岡崎の岡崎遺跡、賀茂川東岸の烏丸御池遺跡が現在までに発見されている。

参考文献

- 京都市『京都の歴史1』平安の新京（株）学芸書林 1970年
京都市『史料京都の歴史』第8巻 左京区（株）平凡社 1985年
横山卓雄・中川要之助『瀬戸内海の移り変わり』（株）三和書房 1991年
京都市『史料京都の歴史』第6巻 北区（株）平凡社 1993年
横山卓雄『京都の自然史』（株）京都自然史研究所 2004年
『京都市遺跡地図台帳』第8版 京都市文化市民局 2007年

（3）既往の調査

植物園北遺跡は、昭和49年(1974)12月の高速鉄道烏丸線北進工事に先立つ分布調査(図5-1)によって発見された。分布調査の範囲は府立植物園の北側、北山通沿いの小地域に限られたものであったが、奈良時代から平安時代の土器・瓦片を採集し、同時代の集落跡としての認識を得ていた(文献1)。

この4年後、京都市の公共下水道工事・配水管敷設工事に伴う立会調査(図5-2)が、北区上賀茂から左京区下鴨の広域な範囲で実施され、この全域で竪穴住居、土坑、溝が検出され、遺跡の規模と内容、時期が再認識された。遺跡範囲は賀茂川と高野川の間で、東西2km、南北1.2kmに広がること、弥生時代後期から古墳時代前期の集落遺跡をメインに、縄文時代、古墳時代後期、飛鳥時代、奈良時代から平安時代、室町時代の遺跡が複合した遺跡とわかった。これ以後、正式に植物園北遺跡として登録・周知されることになった(文献2)。

第1次発掘調査(図5-3)は昭和57年(1982)7月に北区上賀茂神田町15番地の宅地約100㎡で実施された。調査では東西方向で幅5mを測る、礫を敷き詰めた道路跡が検出された。これは昭和47年(1972)の区画整理によって廃絶したもので、周辺の用水路の流路方向から旧条里区画を踏襲している可能性に言及されている(文献3)。

第2次調査(図5-4)は昭和58年(1983)1月に実施された。調査地は北区上賀茂桜井町15番地で糠田児童公園内の防火水槽設置工事に伴うもので、約50㎡の調査であった。調査では平安時代の土器を含んだ3基の土坑が検出されている(文献4)。

第3次調査(図5-5)は昭和59年(1984)4月に実施されたもので、北区上賀茂蟬ヶ垣内町47のマンション建設予定地674㎡であった。このうちの389㎡を調査した。調査では竪穴住居4棟、溝6条、土坑1基を検出した。竪穴住居1号・2号が弥生時代後期、3号・4号が古墳時代前期で、3号がやや古式とされる。土坑は地床炉で古墳時代前期、溝は古墳時代後期のものとされる。出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器、鉄製品有茎鉄鏃・鉈・鉄斧があり、鉄鏃は2号、鉈・鉄斧は4号住居から出土している(文献5)。

昭和59年度から昭和61年度にかけて、市域立会調査(図5-6・7・9)が実施され、左京区松ヶ崎本町1、下鴨北芝町18-2、下鴨水口町47、北区上賀茂向繩手町38、藪田町8で、古墳時代前期の竪穴住居をそれぞれ3棟、1棟、3棟以上、2棟、1棟を検出している(文献6・7・9)。

第4次調査(図5-8)は京都市高速鉄道烏丸線北進工事(北大路駅～北山駅間)に伴うもので、北山通沿いに下鴨通までの区間を調査した。調査は昭和61年(1986)5月から、9箇所のトレンチを設定して実施した。調査面積は合わせて700㎡に達している。調査では縄文時代晩期の土器棺墓、弥生時代前期のピット、古墳時代後期の落ち込み、飛鳥時代から平安時代中期のピット、平安時代後期の柱穴、溝が検出されている。出土遺物については、縄文時代晩期の深鉢が長原式併行、弥生時代前期が第I様式とされ、古墳時代後期から平安時代中期までの土師器、須恵器、黒色土器、白色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦類の出土があり、須恵器は生焼け資料が散見することから近隣での窯跡の存在を推定されている。平安時代後期の遺構からは土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器が出土しており、輸入陶磁器の中に白磁碗・四耳壺、青白磁碗がある(文献8)。

第5次調査(図5-10)は平成元年(1989)4月に実施された。調査地は上賀茂竹ヶ鼻町4番地978㎡の敷地で、このうち316㎡が調査された。検出した遺構は古墳時代前期の竪穴住居2棟、同後期の竪穴住居8棟がある。鎌倉時代から室町時代の遺構は、井戸、柱穴、溝、集石土坑、土坑が、江戸時代の遺構は柱穴、土坑が検出されている。出土遺物には弥生時代の土器、古墳時代前期の土師器、同後期の土師器、須恵器、鎌倉時代・室町時代の土師器、瓦器、瓦質土器、輸入陶磁器、江戸時代の土師器、陶器、漆器碗、銅銭、砥石、鉄釘がある。弥生時代の土器は古墳時代前期の竪穴住居埋土から出土した。古墳時代後期の竪穴住居は植物園北遺跡の発掘調査で初めて確認された。また、鎌倉時代から江戸時代の遺構群は上賀茂神社の社家町の遺構とみられるもので、遺構・遺物を検出したのは今次調査が初めてであった(文献10)。

第6次調査(図5-11)は地下鉄烏丸線北進工事の北山駅舎建設工事に伴うもので、左京区下

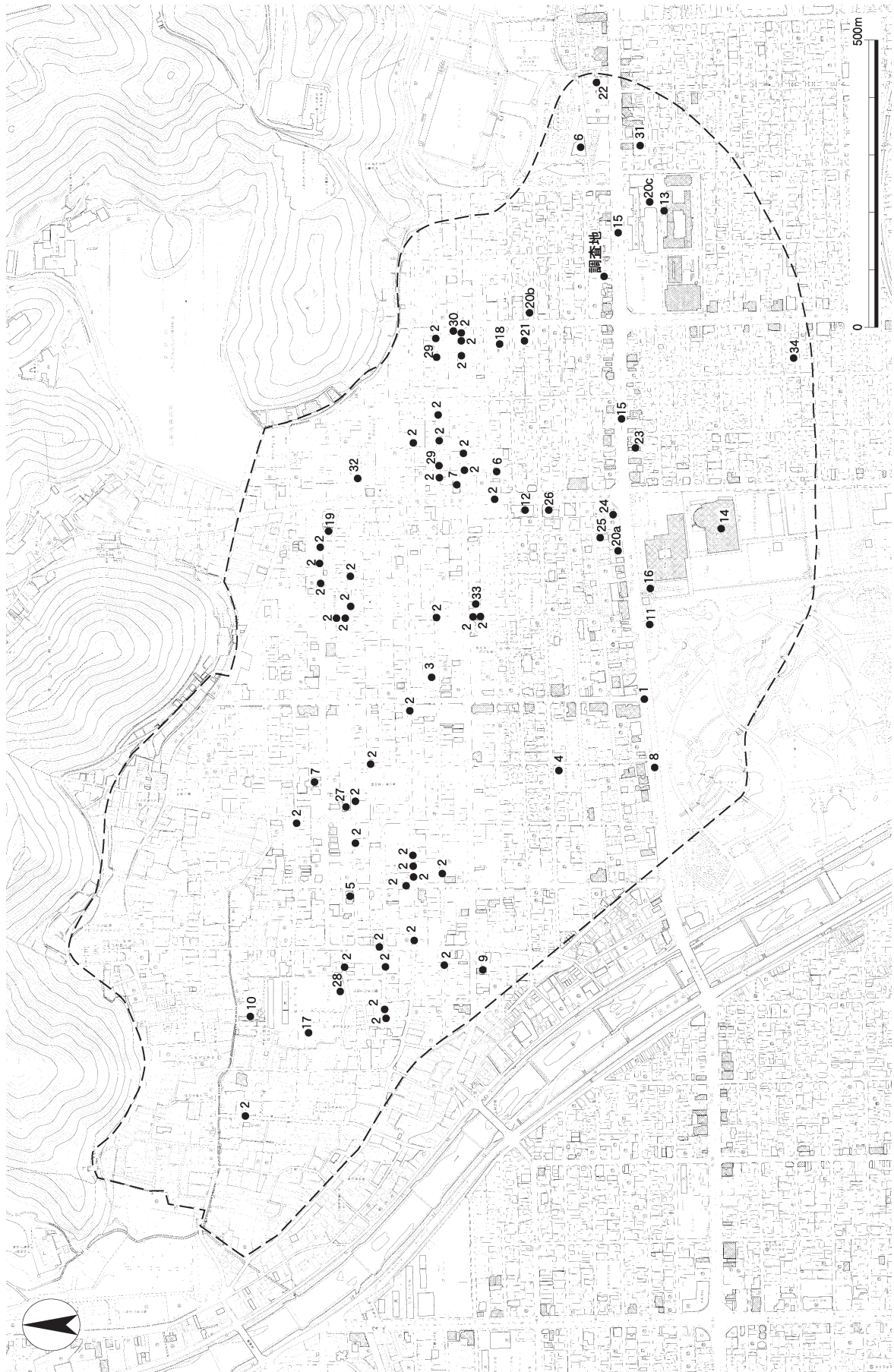


図5 既往調査位置図 (1 : 10,000)

鴨半木町の植物園内北東部の一角であった。調査面積は132㎡で、平成2年(1990)1月に実施された。調査で検出された遺構は、古墳時代に埋没した溝、平安時代中期の溝状遺構、鎌倉時代の土坑、室町時代の溝、江戸時代の土坑、ピットがある。出土遺物は弥生時代以降の各時代のものがあるが、平安時代・鎌倉時代の遺物にまとまりが見受けられるとされる(文献11)。

第7次調査(図5-12)は北区上賀茂松本町98番地のビル建設に伴う調査で、平成2年(1990)5月に実施された。調査で検出された遺構には、古墳時代前期の竪穴住居9棟、土坑2基、流路1条、平安時代から鎌倉時代の掘立柱建物4棟、柱穴多数がある。出土遺物には縄文時代の石斧・石匙、古墳時代前期の土師器、平安時代後期から鎌倉時代の土師器、須恵器、緑釉陶器がある。古墳時代前期の土師器は布留式併行期の古相に位置づけられるもので、山城地方の土器群の一樣相を示す良好な資料で、竪穴住居はいずれも重複することなく、ほぼ同時期に営まれたものとされている(文献12)。

第8次調査(図5-13)は左京区下鴨野々神町1番地のノートルダム女子大学別館建設に伴うもので、平成2年(1990)8月に発掘調査が実施された。調査で検出された遺構には、古墳時代前期の竪穴住居8棟、柱穴、土坑、古墳時代後期の竪穴住居3棟、古墳時代の範囲内と推定される土坑、柱穴がある。出土遺物には、古墳時代前期の土師器、古墳時代後期の土師器、須恵器、古墳時代とみられる土錘、砥石がある。遺構の重複関係や出土土器から、古墳時代前期の竪穴住居を庄内式併行期と布留式併行期に区分される。古墳時代後期の竪穴住居に消失住居とみられるものがあり、遺存炭化材の樹種分析の結果、垂木材は常緑樹のサカキが多く、屋根材はススキと判明した(文献13)。

第9次調査(図5-14)は左京区下鴨半木町の府立大学農学部農園の一部にコンサートホールが建設されることに伴うもので、敷地10,000㎡のうち発掘調査対象面積は6,641㎡で、平成3年(1991)6月に実施された。調査では縄文時代の土器棺墓、古墳時代末から奈良時代にかけての竪穴住居6棟、奈良時代から平安時代の掘立柱建物16棟、柵列、溝、埋納遺構14基、中世の土坑、柱穴などが検出されている。出土遺物としては、縄文時代の深鉢、古墳時代の土師器、須恵器、円筒埴輪片、金環、平安時代の土師器、須恵器、瓦類、その他の遺物に石鏃、鉄製紡錘車、鉄滓が出土している(文献14)。

第10次調査(図5-15)は京都市高速鉄道烏丸線北進工事(北山駅～宝ヶ池駅)に伴うもので、下鴨中通以東の北山通沿いに11箇所の特レンチを設定して平成4年(1992)9月から調査を実施した。調査では弥生時代後期の竪穴住居4棟、古墳時代以前の溝、鎌倉時代から室町時代の柱穴を検出した。出土遺物には、弥生土器、古墳時代土師器、須恵器、中世・近世以降の土師器、陶器がある。東端に設定された特レンチで、弥生時代から古墳時代の遺物包含層が検出されており、植物園北遺跡がさらに東へ広がる可能性が指摘されている(文献15)。

第11次調査(図5-16)は左京区下鴨半木町の府立総合資料館西隣に計画された「陶板名画の庭」建設に伴うもので、平成4年(1992)4月から約920㎡を調査した。調査で検出した遺構は古墳時代前期の溝、古墳時代とみられる掘立柱建物、土坑、柵、柱穴がある。出土遺物のは弥生第IV

様式期の土器、布留式併行期の土師器、古墳時代後期から飛鳥時代の須恵器、平安時代の緑釉陶器、灰釉陶器、白磁があり、その他に太型蛤刃磨製石斧がある。古墳時代前期の溝は東西方向の水路で、幅 10 m 前後、深さ 0.5 m を測る。北岸は南岸に対して 0.9 m 前後の高まりを有する。堆積土の上層から古墳時代前期の遺物、下層から太型蛤刃磨製石斧が出土している（文献 16）。

第 12 次調査（図 5 - 17）は北区上賀茂烏帽子ヶ垣内町 1 番地の京都市上賀茂小学校講堂建替えに伴うもので、約 798 m² を調査した。調査で検出した遺構には、弥生時代から古墳時代後期の流路、古墳時代前期の竪穴住居 3 棟、平安時代の掘立柱建物、平安時代後期から鎌倉時代の土坑、中世の土坑、井戸、ピット、近世の土坑などがある。出土遺物には古墳時代前期の土師器、古墳時代後期の土師器、須恵器、中世の土器片、近世の土器片、化仏とされる金銅仏がある（文献 17）。

第 13 次調査（図 5 - 18）は左京区下鴨北芝町 12 番地の京都府公舎整備工事に伴うもので、平成 5 年（1993）7 月に調査を実施した。調査で検出した遺構には、弥生時代後期中頃から後半の竪穴住居 1 棟、土坑、弥生時代後期末から庄内式初めの竪穴住居 2 棟、庄内式中頃の集石遺構、庄内式末から布留式初めの竪穴住居 1 棟、布留式中頃の竪穴住居 1 棟、弥生時代後期から古墳時代前期の土坑 6 基、平安時代後期と推定される掘立柱建物 2 棟がある。出土遺物には弥生時代の土器、鉄器刀子、古墳時代前期の土師器、平安時代の土師器がある。弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器類は、V 様式後半、庄内式併行、布留式併行に分類されている。検出した竪穴住居の内、庄内式末から布留式初めに比定される竪穴住居で屋内高床部（ベッド状遺構）が検出されており、弥生時代後期に西丹波、播磨、摂津、紀伊で多様なプランが生み出され、庄内式併行期以降に他地域に広がったされている（文献 18）。

第 14 次調査（図 5 - 19）は北区上賀茂松本町で住宅新築工事に伴うもので、平成 6 年（1994）2 月に実施された。調査で検出した遺構には、弥生時代から平安時代の遺物が出土する流路状遺構がある。出土遺物は弥生時代の土器、古墳時代の土器、平安時代の須恵器、緑釉陶器、鎌倉時代から室町時代の土師器、青磁が出土している。流路状遺構からは緑釉陶器火舎が出土しており、祭祀に関わった遺物として注目された（文献 19）。

第 15 次調査（図 5 - 20a・b・c）は調査地が 3 箇所に分かれており、いずれも試掘調査として実施された。図 5 - 20a は北区上賀茂岩ヶ垣内町 93- 1、93- 2、94 番地の約 29.4 m²、平成 6 年（1994）9 月に実施された。古墳時代の溝、ピット群が検出された。出土遺物には古墳時代の土師器、須恵器がある。検出された東西溝は幅約 3 m、深さ 0.4 m を測る。近隣で類似の東西溝（第 11 次調査）が検出されており、連続性をたどることで集落の境界や目的を探れるものとされる。図 5 - 20b は左京区下鴨南茶ノ木町 29 番地の約 70 m² の調査は平成 6 年（1994）6 月に実施された。調査では古墳時代前期の竪穴住居 1 棟、溝 1 条、土坑 1 基が検出された。出土遺物には古墳時代前期の土師器があり、時期幅は布留式古相から中相の幅に収まるとされる。竪穴住居は 2 本柱主柱と想定されている。図 5 - 20c は左京区下鴨野々神町 1- 2 番地のノートルダム小学校運動場の約 20 m² の調査が実施された。調査では飛鳥時代のピット、土坑が検出されている。出土遺

物には飛鳥時代の土師器、須恵器がある。近隣調査での飛鳥時代の遺構・遺物検出は初めてであり、今後の調査に新視点を提供したものとされる（文献20）。

第16次調査（図5-21）は左京区下鴨北芝町の京都府出納官理局公舎整備工事に伴うもので、平成7年（1995）4月に実施された。調査面積は約860㎡であり、調査で検出した遺構には、弥生時代終末から古墳時代初期の竪穴住居4棟、集石遺構2基、古墳時代前期の竪穴住居2棟、土坑6基がある。出土遺物には弥生時代終末・庄内式併行期の土器、古墳時代前期の土器がある。竪穴住居は3棟が弥生時代終末から古墳時代初頭（庄内式併行）、2棟が古墳時代前期（布留式併行後半）とされる。竪穴住居3とされる住居内壁沿いにみられる小坑が壁板を留めた痕跡と推定され、検出例の少なから貴重資料とされる（文献21）。

調査（図5-22）は左京区松ヶ崎井出ヶ海道町地内で平成7年（1995）10月に実施され、調査面積は150㎡であった。調査では奈良時代から平安時代前期とみられる掘立柱建物2棟が検出された。出土遺物には古墳時代前期の土師器、平安時代の土器がある。調査地は遺跡の東辺であったが、遺構・遺物の検出があり、遺跡の広がりについて再考する資料とされよう（文献22）。

第17次調査（図5-23）は左京区下鴨前萩町5-1番地の共同住宅建設に伴うもので、立会調査を延長して確認調査を実施した。調査は平成8年（1996）8月に実施し、調査面積は約80㎡であった。調査で検出した遺構には、縄文時代中期の土坑、弥生時代末期から古墳時代初期の竪穴住居、掘立柱建物がある。出土遺物は縄文時代中期の土器、庄内式併行期の土器がある。縄文時代中期の土坑から出土した土器は、中期後半、北白川C式に属するもので、土坑の性格は落とし穴のような機能を持つものと推測されている。竪穴住居出土の土器は庄内期中葉から後葉の時期に比定され、山背地方における当該期の土器様相の一端を示す土器群とされる（文献23）。

第18次調査（図5-24）は北区上賀茂岩ヶ垣内町109-1番地で実施された。調査面積は約300㎡で、平成9年（1997）8月に調査された。調査では平安時代の掘立柱建物1棟、柱穴が検出されている。出土遺物には古墳時代の土師器、須恵器、平安時代中期の土師器、須恵器がある。調査地南方の第9次調査で多数の掘立柱建物が検出されており、広がりを含めた関連性を指摘されている（文献24）。

調査（図5-25）は北区上賀茂岩ヶ垣内町90番地のマンション建設工事に伴うもので、立会調査を延長して、平成9年（1997）8月に確認調査を実施した。調査で検出した遺構は土師器、須恵器小片の出土する竪穴状遺構、土師器小片が出土する柱穴、同じく土師器小片が出土する溝状遺構、飛鳥時代の須恵器が出土した落込がある。出土遺物は飛鳥時代から江戸時代までの土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器（白磁・青磁）、瓦、鉄鎌がある。鉄鎌は竪穴状遺構から出土したもので、古墳時代後期から奈良時代に多く見られる形態とされている（文献25）。

調査（図5-26）は北区上賀茂岩ヶ垣内町100番地のマンション建設に伴うもので、立会調査を延長して遺構確認調査を実施した。調査は平成11年（1999）4月に実施した。調査で検出した遺構は古墳時代前期の竪穴住居2棟、平安時代の溝、土坑がある。出土遺物は古墳時代前期の土師器、平安時代中期の土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦などがある（文献26）。

第19次調査(図5-27)は北区上賀茂土門町39番地の法務省官舎建設に伴うもので、調査面積は約313㎡で、平成12年(2000)7月から9月にかけて実施した。検出した遺構は弥生時代後期から古墳時代前期に至る流路、古墳時代前期の竪穴住居と古墳時代中期の竪穴住居を検出した。出土遺物は旧石器時代のチャート製搔器剥片、縄文時代晩期の深鉢、弥生時代前期の土器、弥生時代後期の土器、古墳時代前期の土師器、滑石製模造勾玉、古墳時代中期の土師器、須恵器、古墳時代後期の土師器、須恵器、平安時代の土師器、灰釉陶器、中世の土師器がある。今回の調査で、古墳時代中期に属した竪穴住居が初めて検出されたこと、縄文時代晩期から弥生時代前期の土器が検出され、遺構・遺物の広がりを検討する貴重な資料が得られたことなどの成果があったとされる(文献27)。

第20次調査(図5-28)は北区上賀茂烏帽子ヶ垣内24番地上賀茂小学校の児童館新設工事に伴うもので、平成14年(2002)7月から8月にかけて、調査を実施した。調査面積は約191㎡であった。検出した遺構は古墳時代の掘立柱建物2棟、自然流路、室町時代の土坑7基、柱穴4基、江戸時代の畦畔、多数の杭穴がある。出土した遺物は弥生時代後期の土器、古墳時代前期の土師器、古墳時代後期の土師器、須恵器、平安時代の土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、室町時代の土師器、瓦器、須恵質陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、江戸時代の土師器、染付、施釉陶器、棧瓦がある(文献28)。

調査(図5-29)は左京区下鴨水口町のガス低圧管移設及び水道工事に伴う立会調査であった。調査は平成14年(2002)5月から9月にかけて実施した。調査で検出した遺構は古墳時代前期の竪穴住居を4箇所検出した。出土遺物は古墳時代前期の土師器がある。出土した古墳時代前期の土師器高杯・甕は形態・胎土から山陰地方からの搬入品とされている(文献29)。

調査(図5-30)は左京区下鴨水口町57-1のマンション新築工事伴う立会調査で、平成17年(2005)11月に調査が実施された。調査では竪穴住居、ピット、落込が検出され、落込から庄内式併行の土器が出土している(文献30)。

調査(図5-31)は左京区松ヶ崎芝本町6、6-1の共同住宅建設に伴う立会調査の延長で確認調査を実施したものである。調査は平成18年(2006)8月から9月にかけて実施した。検出した遺構は古墳時代前期の竪穴住居6棟、柵列1列、土坑、柱穴がある。出土遺物は古墳時代前期土師器、近世の土器、陶器がある。古墳時代前期の土器は庄内式土器併行期と布留式のものがあるとされる(文献31)。

調査(図5-32)は北区上賀茂池端町41-1のマンション建築に伴う立会調査であった。調査は平成18年(2006)9月に実施した。検出した遺構は古墳時代前期の竪穴住居で、出土遺物は古墳時代前期の布留式土器がある(文献32)。

調査(図5-33)は北区上賀茂松本町53の共同住宅建築に伴う立会調査で、平成18年(2006)10月に実施したものである。調査で検出した遺構は竪穴住居で、遺構埋土から古墳時代前期の布留式土器が出土している。(文献33)

調査(図5-34)は北区下鴨神殿町23番地で宿舎建築工事に伴う立会調査で、平成18年(2006)

表1 既往調査出土土器一覧表

| 調査番号 | IV様式 | V様式 | | | 庄内式 | | | 布留式 | | | 須恵器共伴 |
|------|------|----------|--------|----|-----|--------|----|----------|----|----|----------|
| | | 古相 | 中相 | 新相 | 古相 | 中相 | 新相 | 古相 | 中相 | 新相 | |
| 5 | | | ● | | | | | ● (古墳前期) | | | |
| 6 | | | | | | | | ○ (古墳前期) | | | |
| 7 | | | | | | | | ○ (古墳前期) | | | |
| 9 | | | | | | | | ○ (古墳前期) | | | |
| 10 | | ● (弥生時代) | | | | | | ● (古墳前期) | | | |
| 12 | | | | | | | | ● | | | |
| 13 | | | | | | ● | | | ● | | |
| 15 | | | ○ | | | | | | | | ○ (古墳時代) |
| 16 | ● | | | | | ● | | | ● | | |
| 17 | | ○ (弥生時代) | | | | | | ○ (古墳前期) | | | |
| 18 | | | ● (後葉) | | ● | ● | | ● | ● | | |
| 20 | | | | | | | ● | ● | | | ● |
| 21 | | | ● | | ● | | | | | | ● (後葉) |
| 22 | | | | | | | | ○ (古墳前期) | | | |
| 23 | | | | | | ● (後葉) | | | | | |
| 26 | | | | | | | | ● (古墳前期) | | | |
| 27 | | | ○ | | | | | ○ (古墳前期) | | | ※ |
| 28 | | | ○ | | | ● | | | ● | | |
| 29 | | | | | | | | ● (古墳前期) | | | |
| 30 | | | | | | ● | | | ● | | |
| 31 | | | | | | ● | | | ● | | |
| 32 | | | | | | | | | ○ | | |
| 33 | | | | | | | | | ○ | | |
| 35 | | | ● | | ● | | | | | | |

● 図掲載 ○ 報文のみ ※ 古墳中期の須恵器把手付碗出土

10月に実施した。検出した遺構は古墳時代後期の土師器が出土する竪穴住居を検出した。遺構検出地は遺跡の南端であり、遺跡の南への広がりを示唆する好資料とされている（文献34）。

文献

- 『平安京関係遺跡発掘調査概報』－京都市高速鉄道烏丸線内遺跡発掘調査－ 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1975年
- 「公共下水道工事及び配水管敷設工事に伴う立会調査」1978年11月～1981年2月にかけて実施未報告
- 家崎孝治・ト田健司「植物園北遺跡発掘調査概報」昭和57年度 京都市文化観光局 1983年
- 久世康博「植物園北遺跡（2）」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1983年
- 辻 裕司・木下保明『植物園北遺跡発掘調査概報』昭和59年度 京都市文化観光局 1985年
- 調査一覧表『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和59年度 京都市文化観光局 1984年
- 調査一覧表『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和60年度 京都市文化観光局 1985年
- 小森俊寛・原山充志・長戸満男「植物園北遺跡」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1986年
- 調査一覧表『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局 1986年
- 高 正龍『植物園北遺跡発掘調査概報』平成元年度 京都市文化観光局 1990年
- 長戸満男・小森俊寛「植物園北遺跡2」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1989年
- 高橋 潔「植物園北遺跡」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1990年

- 13 長谷川行孝『ノートルダム女子大学構内遺跡発掘調査報告－植物園北遺跡－』ノートルダム女子大学
1991年
- 14 久世康博「植物園北遺跡」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所
1991年
- 15 高橋 潔・高 正龍「植物園北遺跡」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化
財研究所 1992年
- 16 竹原一彦「植物園北遺跡第11次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第54冊（財）京都府埋蔵文
化財調査研究センター 1993年
- 17 久世康博・津々池惣一「植物園北遺跡1」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋
蔵文化財研究所 1993年
- 18 岸岡貴英・長友朋子・杉本厚典「植物園北遺跡第13次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第58
冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1994年
- 19 高橋 潔「植物園北遺跡（第14次調査）」『京都市内遺跡発掘調査概報』平成6年度 京都市文化観
光局 1994年
- 20 馬瀬智光「植物園北遺跡No.63、No.64、No.65」『京都市内遺跡試掘調査概報』平成6年度 京都市文
化観光局 1994年
- 21 石尾政信・杉本厚典「植物園北遺跡第16次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第70冊（財）京
都府埋蔵文化財調査研究センター 1996年
- 22 久世康博「植物園北遺跡」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所
1995年
- 23 高橋 潔「植物園北遺跡（96 R H 224）」『京都市内遺跡立会調査概報』平成8年度 京都市文化市民
局 1996年
- 24 百瀬正恒「植物園北遺跡」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所
1997年
- 25 近藤章子「植物園北遺跡（97 R H 202）」『京都市内遺跡立会調査概報』平成9年度 京都市文化市民
局 1997年
- 26 吉本健吾・竜子正彦「植物園北遺跡（99 R H 18）」『京都市内遺跡立会調査概報』平成11年度 京
都市文化市民局 1999年
- 27 近藤章子・菅田 薫「植物園北遺跡」『平成12年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵
文化財研究所 2000年
- 28 鈴木廣司・津々池惣一『植物園北遺跡』京都市埋蔵文化財発掘調査概報 2002 - 14（財）京都市埋
蔵文化財研究所 2002年
- 29 堀内寛昭「植物園北遺跡（02 R H 51・53）」『京都市内遺跡立会調査概報』平成14年度 京都市文
化市民局 2003年
- 30 堀内寛昭「植物園北遺跡（05 R H 276）」『京都市内遺跡立会調査概報』平成17年度 京都市文化市
民局 2006年
- 31 吉崎 伸「植物園北遺跡（06 R H 234）」『京都市内遺跡立会調査概報』平成18年度 京都市文化市
民局 2007年
- 32 吉本健吾「植物園北遺跡（06 R H 253）」『京都市内遺跡立会調査概報』平成18年度 京都市文化市
民局 2007年
- 33 吉本健吾「植物園北遺跡（06 R H 313）」『京都市内遺跡立会調査概報』平成18年度 京都市文化市
民局 2007年
- 34 吉本健吾「植物園北遺跡」（06 R H 322）『京都市内遺跡立会調査概報』平成18年度 京都市文化市
民局 2007年
- 35 本報告

2. 遺 構

(1) 基本層序

調査地は、北西から南東に緩やかに傾斜する平地となっている。調査区中央付近から東側にかけてやや傾斜が深まる。盛土は各地区の削平深度によって厚さが異なるが、西側で0.3 m前後、東側で0.7 m前後を測る。西側では第1耕作土0.1～0.2 m、第2耕作土約0.1 m、遺物包含層0.1 m、地山面となる。第1耕作土の表面で標高が69.05～69.15 m、地山面での標高が68.90～69.00 mを測る。調査区東端付近で第1耕作土上面が標高68.50 m、地山面が69.30 mとなっている。地山は暗褐色泥砂層で、一部で灰黄褐色の礫混泥砂層となり、灰黄色の砂礫層が広がる。この地山を掘り込んで遺構が成立し、遺構の上面に黒褐色砂泥の遺物包含層が堆積している。第1耕作土は江戸時代後半から近現代の水田とみられる耕作土、第2耕作土が中世から江戸時代の畝の痕跡が認められる畑作主体の耕作土、遺物包含層は平安時代の遺物を含み、この時期を上限とした耕作土とみることもできよう。

調査区西側から南壁沿いの堆積層は盛土層が0.5～1.2 m、第1耕作土、第2耕作土の堆積があり、地山は褐色の小礫混砂泥となる。複数の段状の耕作土面が認められ、北西から南西方向に畦によって区画された耕作地が段成されていたとみられる。第1耕作土上面が標高69.20 m、69.00 m、68.80 m、68.70 mと計測されるものが確認できる。

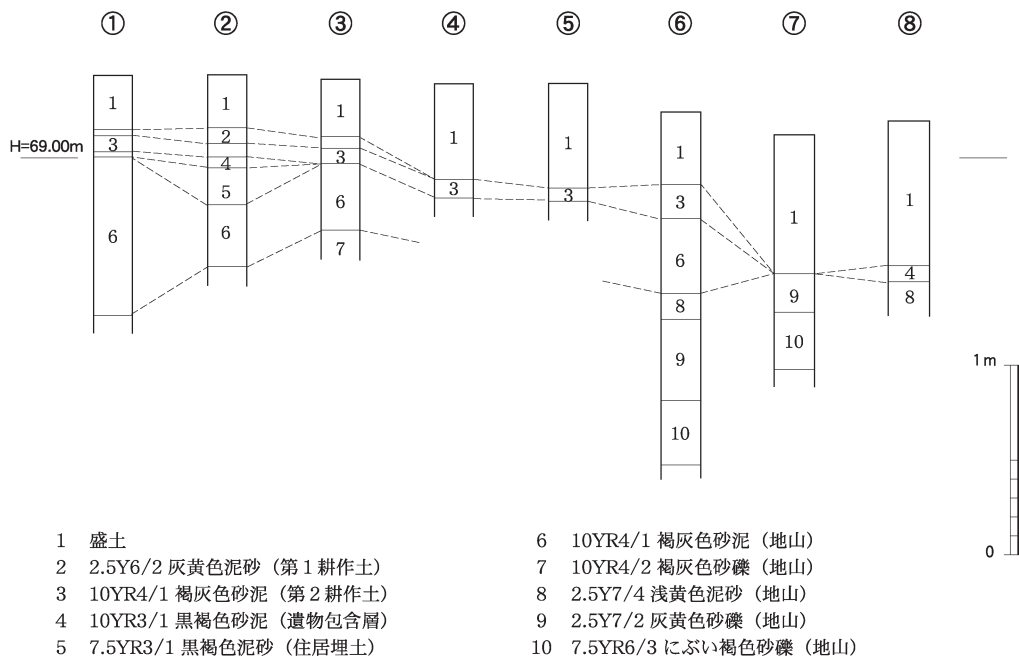


図6 基本層序柱状図 (1:40)

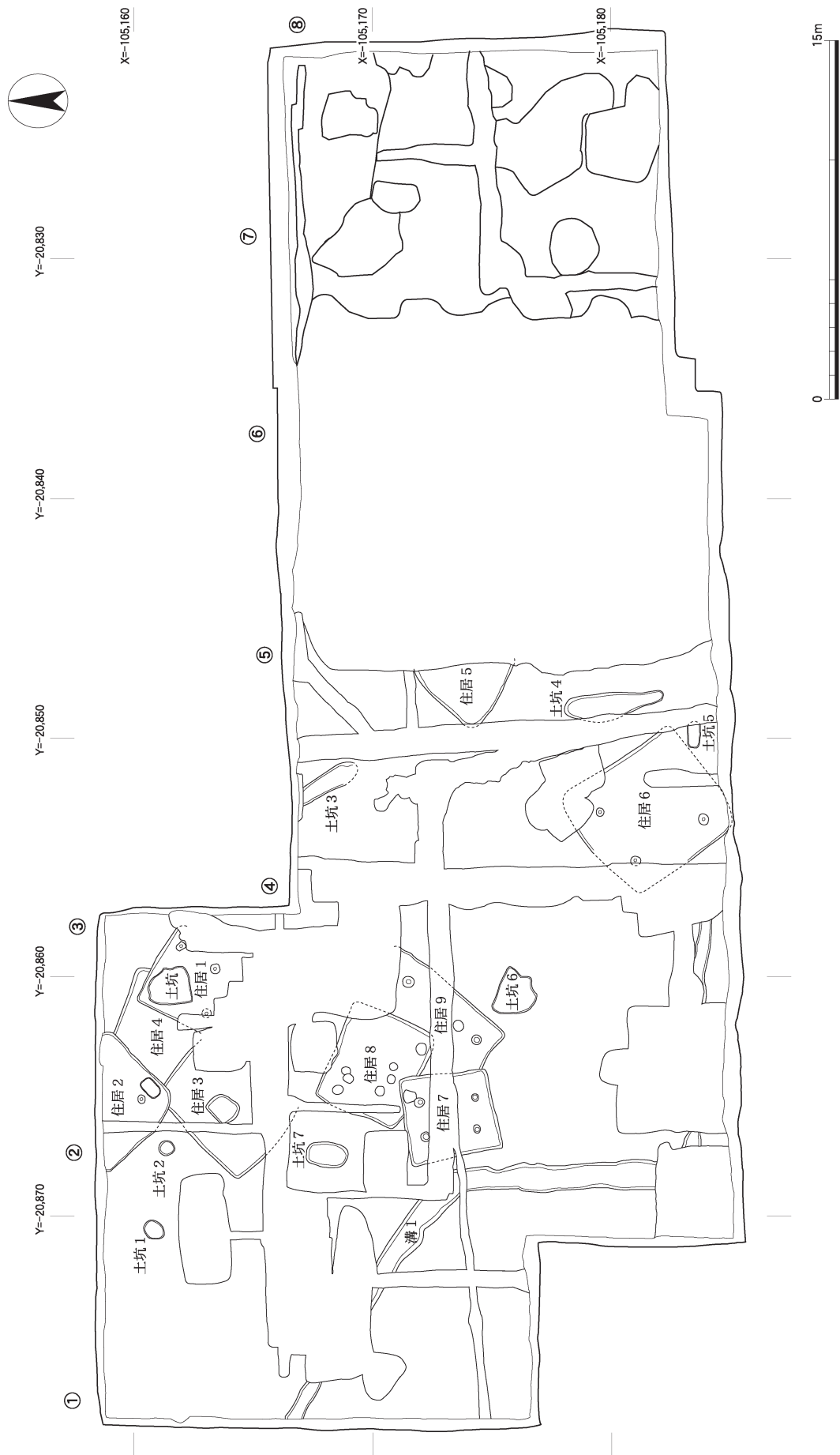
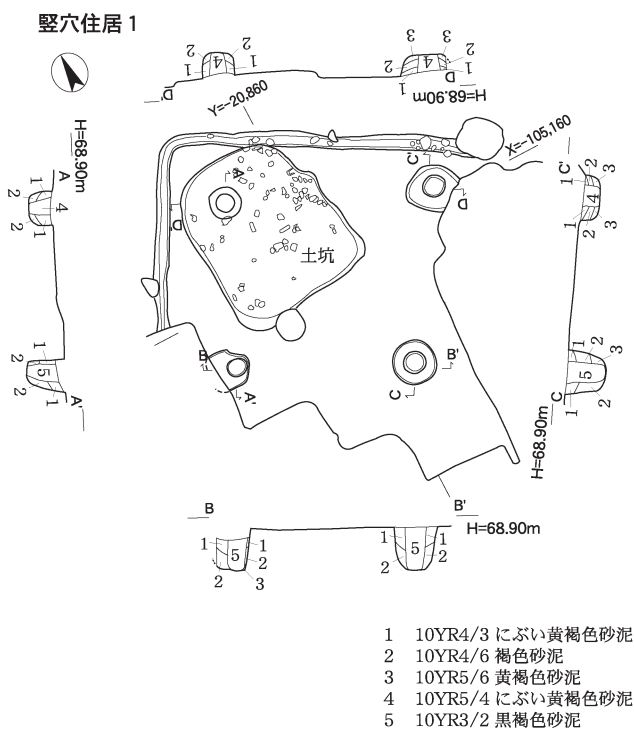


图7 平面实测图 (1 : 250)

(2) 検出遺構

調査で検出した遺構は、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居9棟、土坑7基、ピット群、飛鳥時代の溝1条、平安時代の遺物を含む遺物包含層、中世から近現代に至る耕作土層がある。

竪穴住居1 (図8、図版1・3)



調査区西側北壁近くで検出した。一辺3.5 mを測る方形で、N 30°Eの傾きを持つ。住居埋土は暗褐色土で、深さ0.15 m、床面は平坦で堅く、0.05 mの貼床がみられる。壁溝は北東辺と北西辺で検出された。検出面からの深さは0.20 m、幅は0.15 mを測る。支柱穴は4箇所検出した。掘形径0.3 m、深さ0.3 m、柱当り径0.15 mを測る。柱穴間距離は北から反時計周りに1.75 m、1.80 m、1.80 m、1.75 mと計測される。埋土は2層に分かれ、埋土中から土器の小片が少量検出された。床面上での土器の出土はなかった。住居が廃絶後に、住居内北側に南北1.8 m、東西1.5 m、深さ0.15 mの土坑が形成され、土器が多量に投棄された状態で検出されている。小破片に細分されて投棄されたもので、完形に接着できるものは皆無であった。

竪穴住居2 (図8、図版3) 竪穴住居1の北西、調査区北壁下に北半があり、南半が検出された。一辺4 m以上を測り、南隅の平面形状は隅丸方形である。辺の傾斜はN 40°Eで、南隅の支柱穴は掘形径0.3 m、柱当り0.2 m、深さ0.3 mを測る。埋土は暗褐色と褐色の上下2層が堆積する。床面は均質でやや締まった貼床が認められ、壁溝は幅0.05 m、深さ0.1 mを測る。南東辺の南寄り隅に長辺1.0 m、短辺0.5

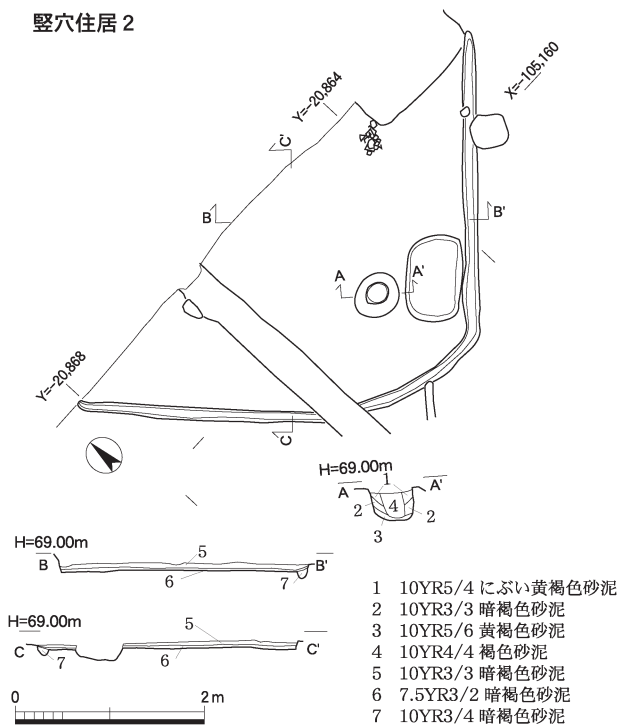


図8 竪穴住居1・2実測図 (1:80)

m、深さ 0.2 m の貯蔵穴が配される。南東辺の北寄り、調査区北壁付近の住居床面に据えられた状態で土器を検出した。

竪穴住居 3 (図版 3) 住居 2 に北隅を切られるが、住居 4 を切る。北西辺が 5 m を測り、北東辺、南西辺の一部を検出した。辺の傾斜は竪穴住居 2 とほぼ同一で、N 40°E となる。埋土は 2 層に分かれ、柱穴は北と西に検出した。それぞれ、掘形 0.4 m、深さ 0.3 m、掘形 0.35 m、深さ 0.4 m を測る。柱間は 2.7 m を離す。住居中央に深さ 0.1 m、径 1.3 m の楕円形の窪みがある。

竪穴住居 4 (図版 3) 住居 1、住居 2、住居 3 との重複が確認され、そのいずれにも切られる関係である。北西辺の一部と東コーナー部を検出している。平面規模は 3 m 以上で、形状は隅丸方形とみられる。埋土は褐色土の堆積が見られ、深さは 0.1 m、壁溝幅 0.1 m、深さ 0.1 m を測る。北西辺の傾きは N 25°E となっている。床面は不明瞭で、埋土中からの出土遺物は僅少である。

竪穴住居 5 (図 9、図版 2) 調査区中央で検出した。東半を攪乱土坑によって大きく削平される。南西辺 4.5 m、北西辺 3 m 以上を検出、南西辺の規模から復元すれば、一辺 4.5 m の隅丸方形とすることができる。検出面から床面までの深さは 0.1 m、壁溝幅 0.05 m、深さ 0.1 m、床面の一部に地山面を削り出した壇状の施設が認められる。遺物は床面上に据えられたものが多数で、埋土中からの出土は小片に限られる。住居の傾きは N 35°E を測る。支柱穴は西側に 1 箇所検出さ

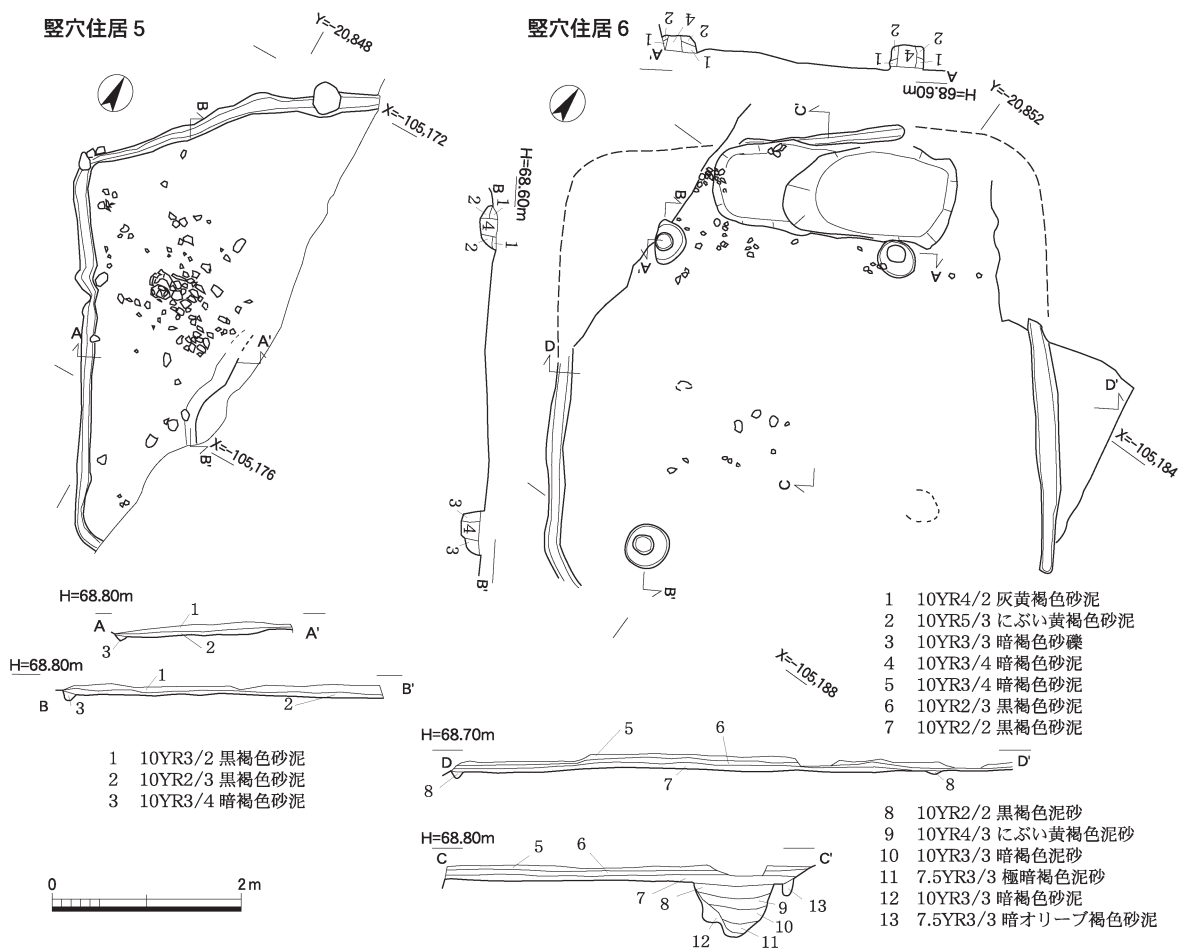


図 9 竪穴住居 5・6 実測図 (1 : 80)

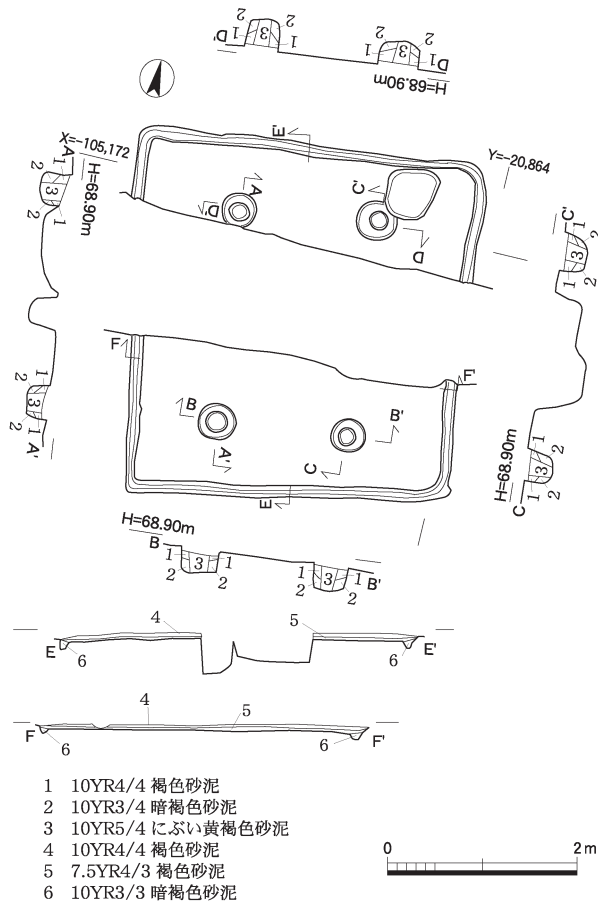


図10 竪穴住居7実測図(1:80)

竪穴住居7(図10、図版3) 調査区西側、中央付近で検出した。南北方向にやや長い長方形で、長径3.7m、短径3.5mを測る。壁溝は幅0.15m、深さ0.1mで全周するが、地形が南側へ傾斜するため、やや浅い。支柱穴は4箇所を確認している。掘形は円形で径0.4m、柱当りは0.2m、柱間寸法は、北西から時計回りに5.5m、3.5m、5.5m、3.6mを測る。埋土は2層に分かれ、床面は均一な土層で堅く締められている。傾きはN10°Wで、出土遺物は埋土、床面共に少ない。

竪穴住居8 竪穴住居7の北側にあり、南側の一部を切られる。隅丸長方形の平面形で、東西にやや長い。長径4.3m、短径3.6mを測る。壁溝は幅0.1m、深さ0.1mを測る。支柱穴は西側の2箇所を確認した。東側の柱穴は攪乱により削平されている。掘形は径0.4m、深さ0.3mを測る。傾きはN30°Eを測る。

竪穴住居9 竪穴住居8の東側にあり、住居8、住居7に切られる。南東辺と南西辺の一部が検出された。南西辺から規模を復元すれば一辺5.5mの方形の平面形とすることができる。壁溝幅0.1m、深さ0.1mを測る。南東側の2箇所の支柱穴を検出している。柱穴掘形は円形で径0.3m、深さ0.2mを測る。埋土、床面からの出土遺物は少量である。

土坑1 調査区北西部に検出した。平面形は楕円で、長径1m、短径0.7m、深さ0.2mを測る。埋土は上層が暗褐色、下層が褐色の礫混の砂泥層で、埋土中から土器片が出土した。

土坑2 北西部で検出した。径0.65mの円形で、深さは0.1mと比較的浅い。埋土は黒褐色土

れた。掘形径0.3m、深さは床面から0.1mを測る。

竪穴住居6(図9、図版2) 調査区中央南側、竪穴住居5の南西方向に5mを離して検出された。北西辺、南西辺、北東辺の一部と、中央部が検出された。寸断された各辺から規模を推定すると、一辺5mの方形住居とできる。埋土は2層に分かれ、壁溝は北西部で検出面から0.3mの深さを測り、幅は0.15mを測る。この北西辺の位置に長径2.0m、短径0.1m、深さ0.5mの貯蔵穴とみられる土坑が付属する。床面は堅く締まった土層が貼り付けられ、出土遺物の大半は床面から出土した。出土遺物は貯蔵穴埋土と貯蔵穴西側床面から多く出土している。支柱穴は3基を検出しており、掘形径0.3m、深さ0.2m前後を測る。北側の柱穴から反時計廻りに2.5m、3mを離している。

に灰黄褐色土が混入している。土器の底部が据えられた状態で検出されており、土器の上部は削平されて失われたものとみられる。

土坑3 (図11) 調査区中央北壁際で検出された。長楕円の平面形状で、北西から南東方向に長軸を向ける。幅0.8 m、長さ1.8 m以上で、北端は調査区北壁下に延びる。断面形は逆三角形で、深さ0.5 mを測る。埋土はレンズ状の堆積がみられ、最下層に均質な黒褐色泥砂層が堆積する。

土坑4 (図11) 調査区中央南側で検出した。北西から南東にわずかに振れる長楕円形の平面形状で、北側が幅広、南側で狭まる。長さ4.6 m、幅0.6 ~ 1.2 mを測る。北側断面形は逆三角形で深さは0.7 mを測る。レンズ状の堆積がみられ、最下層に黒褐色の粘土層が堆積する。南側は浅くなり南端で上がりきる。土坑3と断面形状、堆積状況、長軸方向が近似する。土坑3方向から連続する溝で、上面が削平を受けて、深い部分のみが遺存したものとみられよう。

土坑5 土坑4の南西2 mの位置で検出した。東西方向に長い楕円形状で、東西1 m、南北0.6 m、深さ0.4 mを測る。堆積土は上層が黒褐色土、下層が礫混の黒褐色泥砂層である。

土坑6 (図12) 調査区中央、住居8の南西で検出した。平面形は不定形で、東西2 m、南北1.9 mを測る。深さ0.1 mを測る。埋土は上層が黒褐色砂泥、下層に黒色砂泥層が堆積する。土坑の中央やや東寄り、古墳時代前期の土師器器台が出土した。土坑底面に据えられていたものが、やや傾いた状態で埋没していたものとみられる。

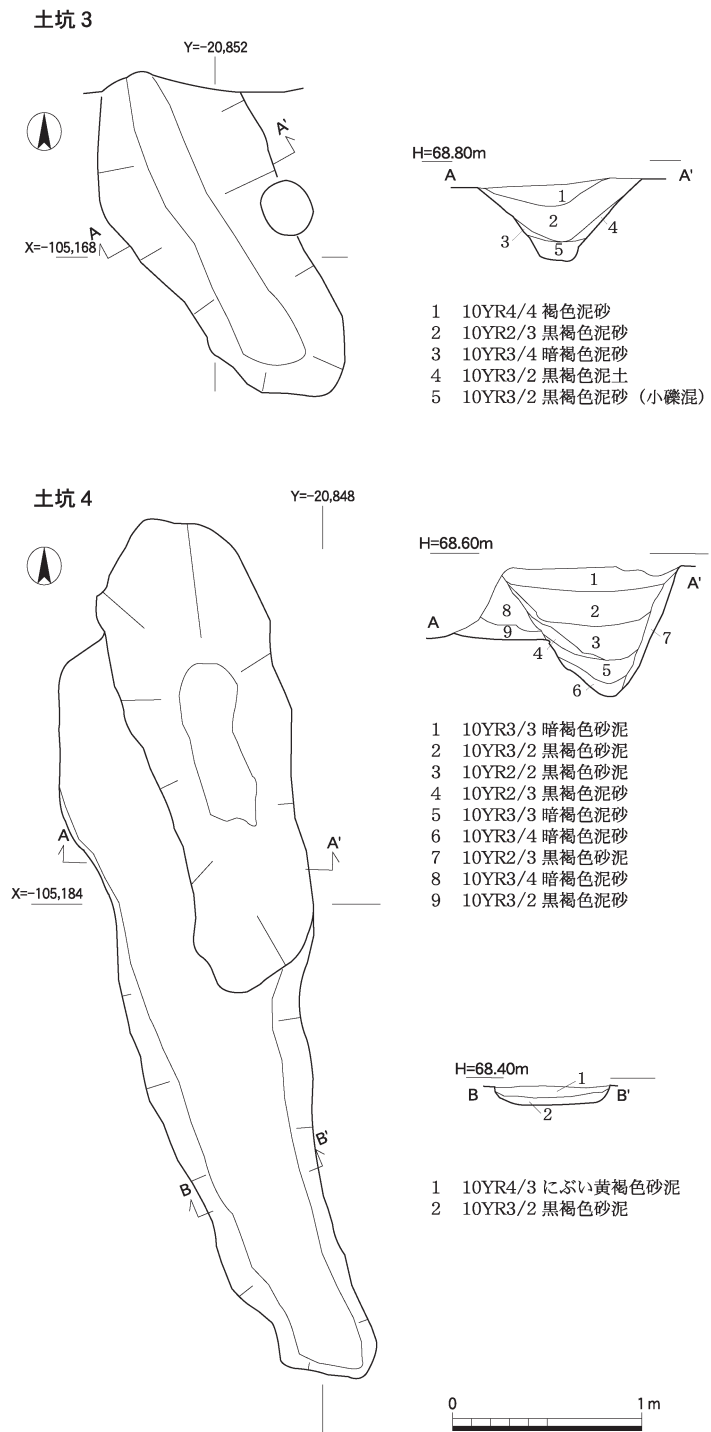


図11 土坑3・4実測図(1:40)

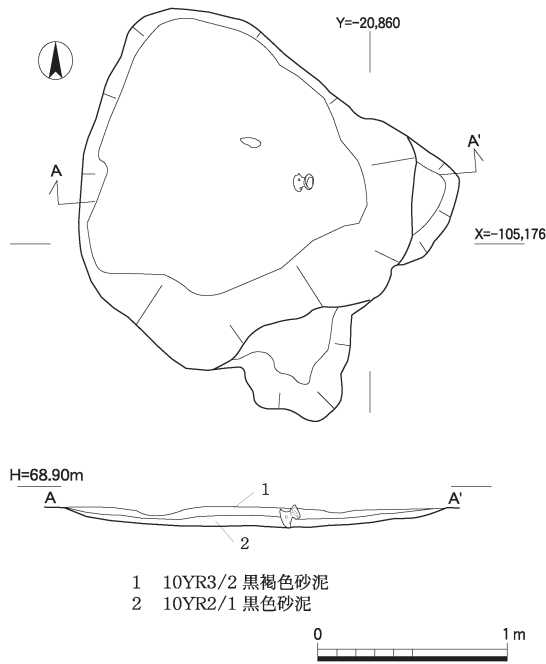


図12 土坑6実測図(1:40)

土坑7 住居8の西方で検出した。楕円の平面形を呈し、長径1.7m、短径1.1mを測る。深さ0.1mで、埋土は黒褐色砂泥層が堆積する。

ピット群 調査区西側中央と、調査区西側北部でまとまって検出した。円形で、掘形0.2m前後、深さ0.2mのものが多数である。重複した住居住居が検出された地区に多く検出される。掘形埋土から土器片が出土するものもある。建物としての並びは確認されていない。

溝1 調査区西端から斜め南に延び、南に屈曲、さらに東方向に延びる。幅約1m、深さ0.4mを測る。上層と中層はそれぞれ褐色砂泥、黒褐色砂泥が堆積するが、下層は褐色

砂礫の堆積がみとめられる。この褐色砂礫層中から飛鳥時代の須恵器杯身が出土している。

遺物包含層 調査区北西部で検出された黒褐色砂泥層で、竪穴住居と地山面上に薄く堆積する。堆積層中から古墳時代前期の土師器小片、平安時代の灰釉陶器片が出土する。平安時代を下限にした耕作土層とみられよう。

耕作土層 盛土下に灰黄色泥砂層と褐灰色砂泥層の2層が認められる。上層の堆積層には江戸時代、近・現代の遺物が混入しており、盛土以前の水田耕作土層とみられる。(第1耕作土) 下層の堆積層は、層中から中世の瓦質土器片が出土し、畝とみられる起伏も確認できることから、室町時代から江戸時代の堆積層で畑作を主体にした耕作土とみられよう。(第2耕作土)

表2 遺構概要表

| 時代 | 遺構 | 備考 |
|-------------------|-------------|----|
| 弥生時代後期 ～古墳時代前期 | 竪穴住居9棟、土坑7基 | |
| 飛鳥時代 | 溝1条 | |

3. 遺物

(1) 遺物の概要

出土した遺物には縄文時代前期の石匙、弥生時代後期から古墳時代前期に属した土器壺・甕・鉢・高杯・器台、飛鳥時代の須恵器杯身、平安時代の灰釉陶器椀、室町時代の瓦質土器鉢、焼締陶器鉢、江戸時代の土師器皿、土師質土器塩壺、陶器椀、瓦類がある。弥生時代後期から古墳時代前期の土器は竪穴住居2・5・6の床面から出土したものと、竪穴住居1上面土坑埋土、土坑2・4・5・6埋土、竪穴住居6貯蔵穴から出土したものとあり、各竪穴住居の上面検出中のもの、遺物包含層検出中に出土したのものがある。また、調査区東端の遺物包含層からは縄文時代の石製品が出土している。

(2) 土器類

竪穴住居1上面土坑出土土器（1～6）（図13） 1は広口の壺で、頸部から口縁が遺存し、体部以下を欠いている。外反気味の口縁が斜め上方に延び、端部は下方に拡張されて垂下する。2は二重口縁の壺とみられるもので、体部上端と頸部の一部が遺存する。体部上端外面に突帯を巻き刻み目文を配する。3は直口の壺とみられるもので、頸部の一部が遺存する。頸部はやや外反気味に斜め上方に延びる。4は壺とみられる底部と体部下半が遺存したもので、突出する小さい底部と内湾気味に横方向に広がる体部下半からなる。5は同じく壺とみられる底部と体部下端が遺存するもので、底部は中央がわずかに窪み、体部は横方向に広がって延びる。6は鉢の底部と体部下端が遺存するものとみられ、底部中央が削孔される。体部下端は斜め上方に直線的に延びる。

竪穴住居2出土土器（7）（図13） 7は甕で、体部と頸部、口縁部が遺存する。体部は丸みを帯びて内湾し、頸部はくの字に屈曲して口縁部に至り、端部は内傾気味に立ち上がる。端部外面は心持ち肥厚させ擬凹線を施す。体部外面は粗いタタキ、内面は口縁下端までケズる。同時期的な類例は近江湖西、若狭、越前でみられる。

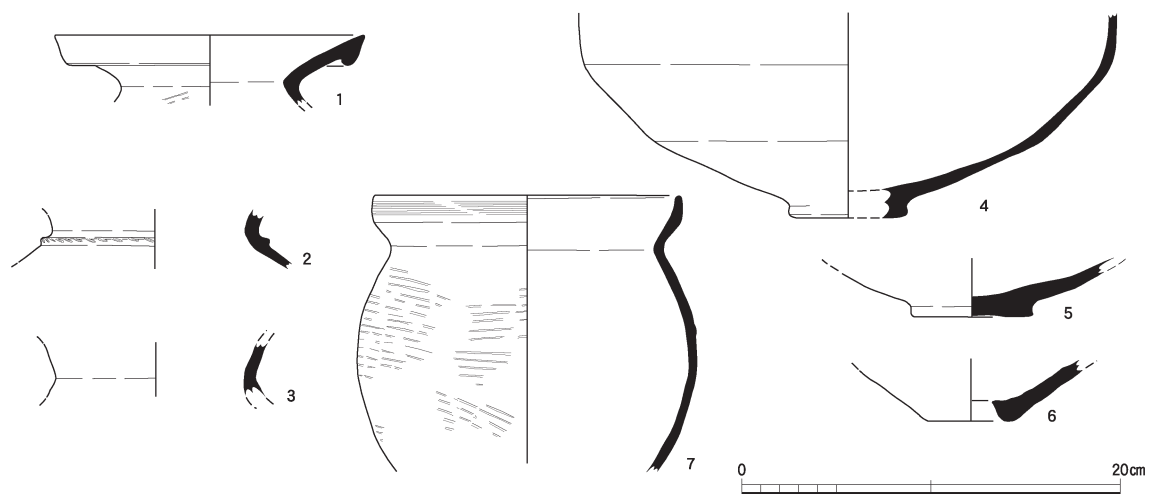


図13 土器実測図1（1：4）

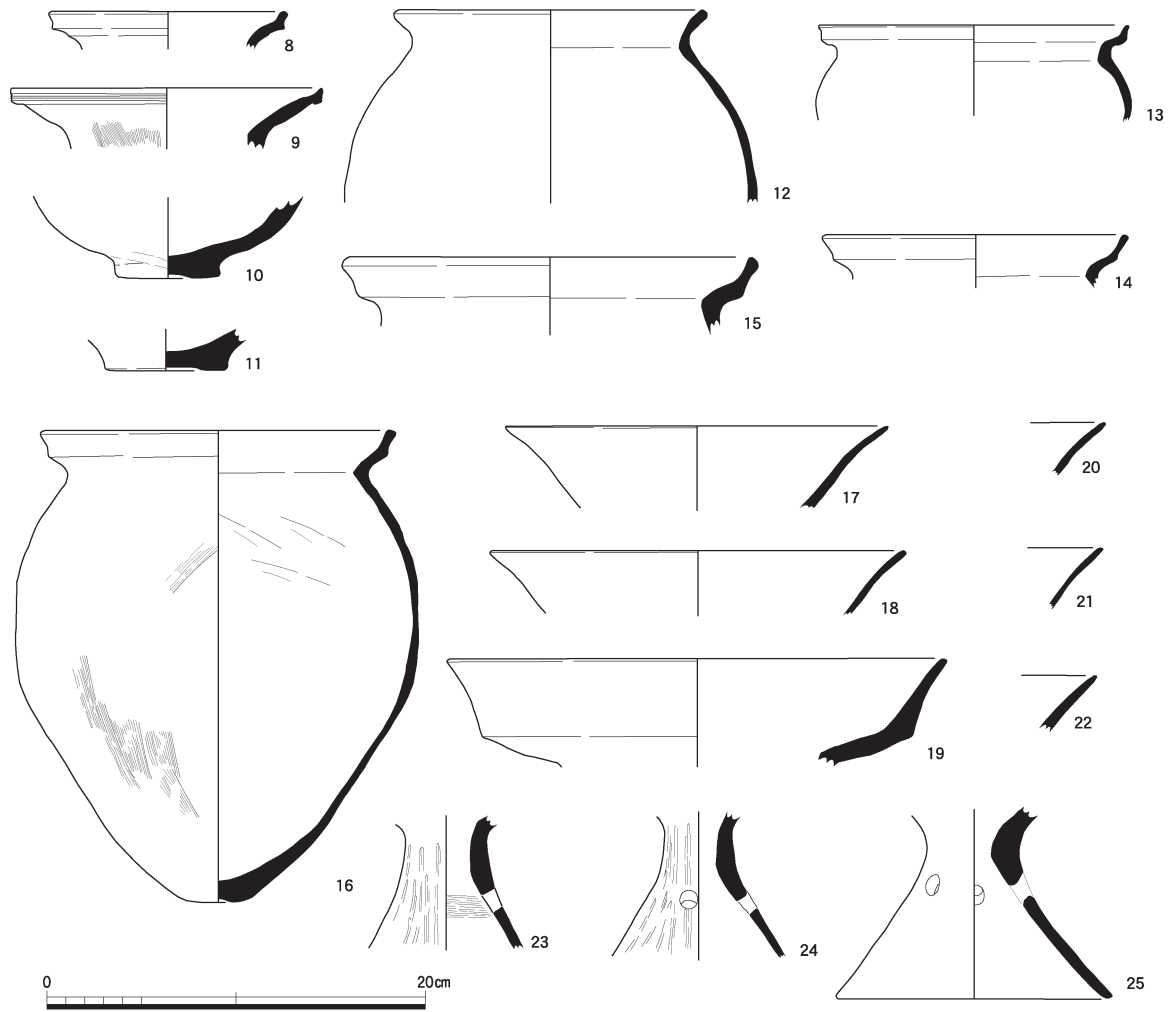


図14 土器実測図2 (1:4)

竪穴住居5出土土器(8~25)(図14) 8は広口の壺で、口縁部のみが遺存する。口縁上半は外反して伸び端部は外反気味に摘み上げる。二重口縁状を呈する。9は広口の壺で、口縁部のみが遺存する。口縁は斜め上方に直線的に伸びて端部を拡張する。口縁下端にハケ、口縁端部外面に多条沈線を施す。10は壺で、底部と体部下端が遺存する。底部は中央がやや窪み、体部下端は内湾して立ち上がる。11は壺で、底部のみが遺存する。底部は高台風で、中央がわずかに窪む。12は甕で、体部上半と口縁が遺存する。体部上半は内湾して伸び、口縁部は外方に短く折れ曲がる。端部はやや膨らみ、端面は丸く収める。13は甕で、体部上端と口縁部が遺存する。内湾して伸びた体部は口縁部で外方に折り曲げ、端部をさらに上方に折れ曲げて先端はやや外半させる。いわゆる受け口状口縁を呈する。14は甕で口縁部のみが遺存する。口縁部は外方に折れ曲げられ、端部は斜め上方に伸びて端面は膨らむ。退化気味の受け口状口縁を呈する。15は甕で口縁部のみが遺存する。体部から横方向に折り曲げられた口縁は、端部で更に斜め上方に立ち上げられて先端は肥厚気味に丸く収める。退化気味の受け口口縁を呈する。16は甕で、底部は突出気味で、中央が窪む。体部は内湾して立ち上がり、体部最大径がやや上位にある倒卵形を呈している。口縁はくの字に外方へ曲げられ、上半を緩く上方に持ち上げて端面を平坦にする。退化気味の受け口口

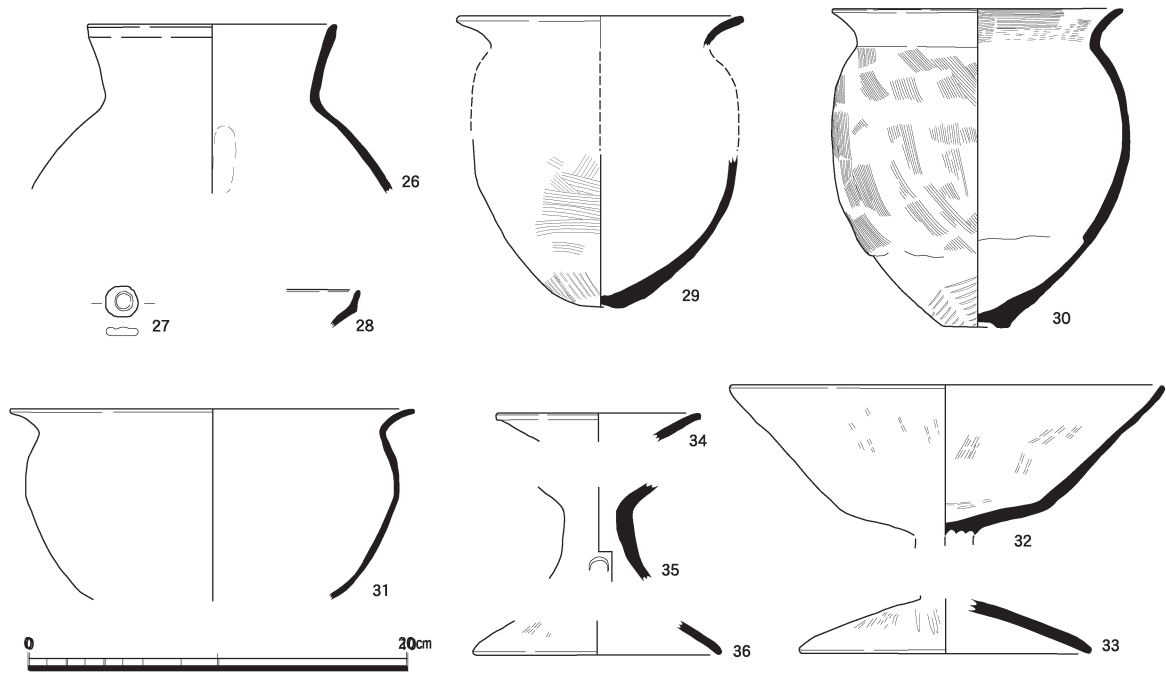


図 15 土器実測図 3 (1 : 4)

縁を呈する。体部外面はハケ、内面下半をナデ、上半から口縁下端までをケズリで仕上げる。17は高杯で、皿部上半が遺存する。皿部上半は外反気味に斜め上方に延び、端部は丸く収める。18は高杯で、皿部上半が遺存する。皿部上半は外反気味に立ち上がり、端部をやや膨らませて丸く収める。19は高杯で皿部の遺存したものである。皿部下半は緩く内湾して横方向に広がり、皿部上半は上方に屈曲して、外反気味に斜め上方に延びる。20～22も高杯で、いずれも皿部口縁上半が遺存する。緩く外反気味に斜め上方に延び、端部は丸く収める。23・24は器台で、筒部のみが遺存したもので、受け部から脚部を中空にするタイプとみられる。脚部上端に円孔透しを入れる。筒部から脚部上半を縦方向にミガキで仕上げる。25も器台で、筒部から脚部が遺存する。筒部は中空で、脚部はハの字状に延び、円孔による透かしを三方に配する。

竪穴住居6出土土器(26～36)(図15) 26は短頸の壺で、体部上半と頸部、口縁部が遺存する。球状の体部上半から緩く斜め上方に開く頸部が取り付け、口縁端部を心持ち外反させて丸く収める。27は円形浮文残欠とみられるもので、二重口縁壺の口縁部に加飾されたものが剥落したとみられる。28は甕で、口縁部のみが遺存する。退化した受け口状口縁を持つものとみられる。29は甕で、口縁部と底部、体部下半以下が遺存する。底部は尖底状に作るが中央部が心持ち窪む。体部は倒卵形で体部上半に最大径を持つ。口縁部は短く外反して端部は膨らみ気味に丸く収める。体部外面下端にタタキ、外面下半をハケメ調整する。30は甕で、高台状の中央が窪む底部と体部上半に最大径を持つ倒卵形の体部に短く外反する口縁が取り付く。端部は丸く収める。体部外面下半にタタキ、上半をハケ調整する。体部下半と上半を分割成形した痕跡を明瞭にとどめる。31は鉢で、体部と口縁部が遺存する。体部上半に最大径を持ち、口径に比して器高が低いものとみられる。口縁部は短く外反し端部は丸く収める。32は高杯で、杯部が遺存する。杯部下半は緩く

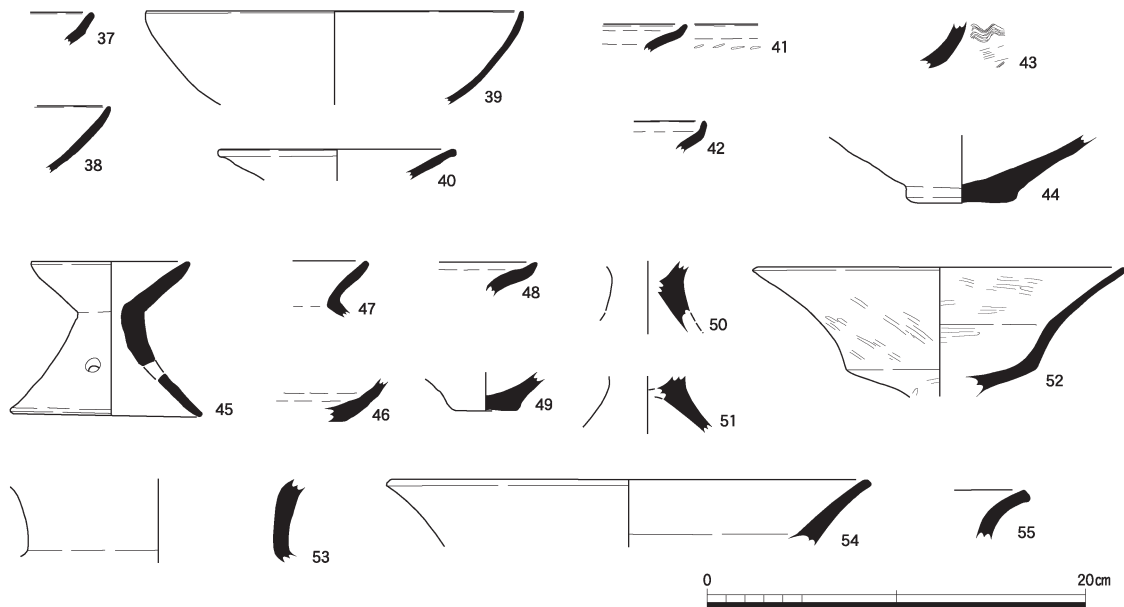


図16 土器実測図4 (1:4)

外方に広がり、上半が直線的に斜め上方に延びる。端部は丸く収めている。33は高杯の脚部とみられるもので、脚部は内湾状に外方に広がる。外面に縦方向のミガキを施す。34は器台で、皿部が遺存したものとみられる。皿部は直線的に斜め上方に延び、口縁端部は面を持つ。35は器台で、筒部のみが遺存する。筒部は中空のタイプで円孔の透かしを穿つ。36は器台で、脚部が遺存したもので縦方向のミガキが施される。

土坑4出土土器(37~40)(図16) 37は甕で口縁部のみが遺存する。退化した受け口口縁のものとみられる。38・39は高杯で杯部のみが遺存したものとみられる。杯部は椀状のもので内湾して立ち上がり、口縁端部は丸く収めている。40は器台の皿部が遺存したもので、口縁は直線的に延びて端部は丸く収める。

竪穴住居6貯蔵穴出土土器(41・42)(図16) いずれも甕の口縁部が遺存したもので、受け口状口縁の退化形態の甕で、41は外面に刻み目文を施す。

土坑5出土土器(43・44)(図16) 43は鉢とみられる体部片で、外面上端に櫛描波状文を施し、下方をハケメ調整する。44は壺の底部とみられるもので、突出した底部を持ち、中央部をわずかに窪ませる。

土坑6出土土器(45)(図16) 器台で、逆ハの字状の皿部と中空の筒部を挟んでハの字に広がる脚部からなり、脚部やや上位に円孔の透かしを三方に配している。

溝1出土土器(46)(図16) 須恵器杯身で、底部と体部の下半が遺存したものである。底部はへら切り、体部は内湾気味に立ち上がる。

竪穴住居3上面出土土器(47)(図16) 甕の口縁部でくの字に外反する口縁部を持ち、端部が心持ち内傾して丸く収める。

竪穴住居6上面出土土器(48~51)(図16) 48・49は甕で、それぞれ口縁部と底部の破片である。48は退化した受け口口縁を持ち、49は平底の底部を持つ。50・51は中実の筒部を持つ

高杯とみられるもので、筒部のみが遺存した。

土坑4上面出土土器(52)(図16) 高杯の杯部が遺存したもので、杯部下半は内湾気味に横方向に延び、上半は外反して大きく広がる。内面と外面にミガキを施す。

調査区中央部黒褐色砂泥出土土器(53・54)(図16) 53は広口の壺で、頸部が遺存したものとみられる。54は高杯で、杯部口縁が遺存したものとみられる。

調査区東部黒褐色砂泥出土土器(55)(図16) 壺の口縁部とみられる破片で、外反して広がり、端部は外方に面を持つ。

竪穴住居3上面出土土器(56～63)(図17) 56は土師器皿の破片で、口縁端部が大きく内方に折り曲げられる。平安時代後期に属したものとみられる。57～62も土師器皿とみられるもので、62は底部から口縁部まで遺存する。底部と体部の内面境い目に沈線を巡らせる。63は塩壺で、底部と体部下半が遺存したものである。いずれも江戸時代後期に属したものとみられる。

調査区東部耕作土1灰黄色砂泥出土土器(64・65)(図17) いずれも土師器皿で、口径の小さい小皿である。江戸時代後期に属したものである。

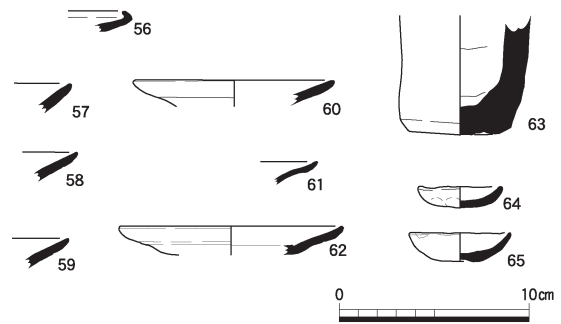


図17 土器実測図5(1:4)

(3) 石製品

石匙(66)(図18・19) 調査区北東部の黒褐色砂泥から石匙が出土した。つまみ状の突起を持つサヌカイト製の打製石器で、上部中央につまみが付き、身が横方向に長い横型石匙である。わずかに湾曲する剥片の周縁に刃部が形成され、両面とも調整される。長辺と短辺があり、長辺は尖り気味の先端をもつ。幅7.85 cm、高さ3.9 cm、厚さ0.75 cm、重さ20.3 gである。

石匙は縄文時代早期には北海道・東北で普及するが、西日本や九州ではやや遅れて早期後半に出現する。京都市内での類例の出土は、戦前に行われた北白川小倉町石器時代遺跡の調査で縄文時代前期の北白川下層式土器に伴って出土したことを嚙矢¹⁾として、小倉町別当町遺跡、植物園北遺跡³⁾、上ノ段町遺跡、平

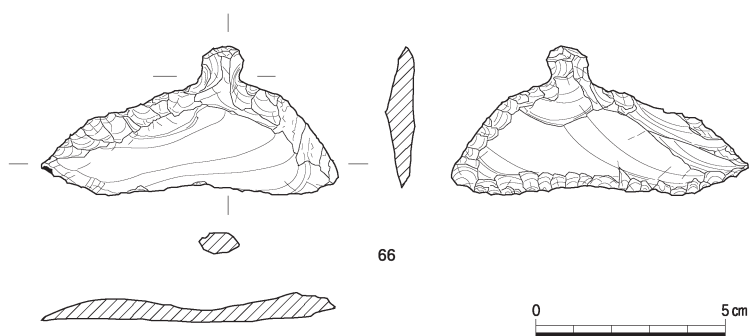


図18 石匙実測図(1:2)



図19 石匙

安京右京三条一坊跡⁵⁾、長岡京右京二条四坊一町跡・上里遺跡⁶⁾、長岡京左京四条三・四坊跡⁷⁾、中久世遺跡⁸⁾などがある。北白川小倉町石器時代遺跡で出土した石匙は正三角形に近い平面形か、縦型の特徴を持つが、本調査と2003年調査の上ノ段町遺跡出土の石匙は横型である。

従来は動物を解体、調理する道具と考えられていたが、木や骨の加工、植物の穂先を刈る収穫具としての機能も考えられ、多目的な用途をもった石器と推定される。

註

- 1) 梅原末治「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告 第十六冊』京都府 1935年
- 2) 長戸満男「小倉町別当町遺跡」『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 3) 高橋 潔「植物園北遺跡」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 4) 中村 敦「上ノ段町遺跡」『京都嵯峨野の遺跡 - 広域立会調査による遺跡調査報告 -』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1997年
津々池惣一・東 洋一・太田吉男『上ノ段町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-2
- 5) 伊藤 潔「平安京右京三条一坊1」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 6) 網 伸也・百瀬正恒『長岡京右京二条四坊一町跡・上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-4
- 7) 平田 泰・本 弥八郎「左京四条三坊・四坊」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1984年
- 8) 久世康博「中久世遺跡」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要（試掘・立会調査編）』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1983年

表3 遺物概要表

| 時代 | 内容 | コンテナ箱数 | Aランク点数 | Bランク箱数 | Cランク箱数 |
|-------------------|-----------|--------|---------------|--------|--------|
| 縄文時代前期 | 石器 | | 石器1点 | | |
| 弥生時代後期 ～古墳時代前期 | 土器 | | 土器54点 | | |
| 飛鳥時代 | 須恵器 | | 須恵器1点 | | |
| 平安時代 | 土師器 | | 土師器1点 | | |
| 江戸時代 | 土師器、土師質土器 | | 土師器8点、土師質土器1点 | | |
| 合計 | | 47箱 | 66点（4箱） | 3箱 | 40箱 |

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より7箱多くなっている。

4. ま と め

今回の調査で検出した主要な遺構には竪穴住居、土坑、ピット、溝がある。竪穴住居と土坑、一部のピットから弥生時代後期から古墳時代前期の土器が出土した。溝からは飛鳥時代の須恵器杯が出土した。また、調査区東端の堆積土層からは縄文時代前期とみられる石匙も出土している。

弥生時代後期から古墳時代前期の土器には、V様式新相期に比定できる土器が、竪穴住居1上面土坑、竪穴住居2、竪穴住居5から出土し、庄内式古相期と比定できる土器が竪穴住居6、土坑4、土坑6から出土した。竪穴住居2は竪穴住居3・4と重複し、竪穴住居7は竪穴住居8・9と重複する。このため、調査地で変遷した遺構は、竪穴住居4・9が先行し、竪穴住居1・3・8、竪穴住居1上面土坑・竪穴住居2・5と続き、竪穴住居6・土坑4・6の順で変遷したと考えることができる。その後、長期の空白期を経て、飛鳥時代の7世紀後半期に至って溝1が造られている。平安時代後期には耕作に関係したとみられる遺物包含層が形成され、中世から江戸時代にかけて耕作地となり、とりわけ水田耕作が盛行したのは江戸時代後期以降とみることができよう。

植物園北遺跡の既往の調査で検出された遺構と遺物には、27の調査で旧石器時代のチャート製搔器剥片、本調査の縄文時代前期の石匙も、23の調査で縄文時代中期の土器と土坑（落とし穴）、12の調査で縄文時代の石斧と石匙も、5の調査で縄文時代の土器が検出されている。また、8の調査、14の調査で縄文時代晩期から弥生時代前期の土器棺墓、25の調査で縄文時代晩期の深鉢、弥生時代前期の甕・壺を検出している。16の調査で弥生時代中期の土器、太型蛤刃石斧が出土している。

弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居、掘立柱建物、土坑、溝はほぼ全域で検出されている。古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴住居、掘立柱建物、溝は遺跡内北西の上賀茂地区と植物園北側から東側一帯の地区に二極分化して検出されている。27の調査では古墳時代中期の竪穴住居と須恵器碗が上賀茂地区内で検出されている。また14の調査では弥生時代の石鏃、古墳時代の鉄製紡錘車、円筒埴輪片、金環などが出土している。

奈良時代から平安時代の掘立柱建物、柵列、溝、埋納遺構などは植物園の北西辺や府立大農園一帯で検出される。鎌倉時代以降の遺構は古墳時代後期から飛鳥時代の遺構分布範囲に重なり、現在の社家町に繋がることがみてとれる。

今回の調査で検出した弥生時代後期から古墳時代前期の遺構群は、植物園北遺跡の全域で検出される主要遺構を構成する一部とみられるものであり、出土遺物の時期幅も限られている。既往の植物園北遺跡の調査で出土した弥生時代後期から古墳時代前期の土器と時期についての報告やコメントも多数にのぼる。これらと今回の調査で出土した遺物を合わせて一覧化し、遺跡動態の把握に供したい。(表1 既往調査出土土器一覧表)

表4 掲載遺物一覧表

| 番号 | 器種 | 器形 | 口径 | 器高 | 調整 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 遺構名 | 時代 |
|----|----|----|-----------------|---------|--------------|-----|--|-----|------------|-----------|
| 1 | 土器 | 壺 | 口径16.3 | 3.7以上 | ヨコナデ、タタキ | やや粗 | にぶい黄橙 (10YR7/4) | 良 | 竪穴住居1内(土坑) | 弥生後期～古墳前期 |
| 2 | 土器 | 壺 | 頸径10.9 | 3.1以上 | ヨコナデ、刻み目文 | やや粗 | にぶい黄橙 (10YR7/3) | 良 | 竪穴住居1内(土坑) | 弥生後期～古墳前期 |
| 3 | 土器 | 壺 | 頸径10.6 | 2.8以上 | | やや粗 | 浅黄 (2.5Y 7/3) | 良 | 竪穴住居1内(土坑) | 弥生後期～古墳前期 |
| 4 | 土器 | 壺 | 底径6.2 | 10.8以上 | ナデ | やや粗 | 外面 にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面 黄灰 (2.5Y6/1) | 良 | 竪穴住居1内(土坑) | 弥生後期～古墳前期 |
| 5 | 土器 | 壺 | 底径6.0 | 3.1以上 | ナデ | やや粗 | 灰白 (2.5Y8/2) | 良 | 竪穴住居1内(土坑) | 弥生後期～古墳前期 |
| 6 | 土器 | 鉢 | 底径4.6 | 3.3以上 | ナデ | 密 | にぶい黄橙 (10YR7/3) | 良 | 竪穴住居1内(土坑) | 弥生後期～古墳前期 |
| 7 | 土器 | 甕 | 口径16.0 | 14.1以上 | 擬凹線文、タタキ、ケズリ | やや粗 | 外面 灰褐 (7.5YR4/2) 内面 にぶい橙 (7.5YR6/4) | 良 | 竪穴住居2 | 弥生後期～古墳前期 |
| 8 | 土器 | 壺 | 口径12.2 | 2.0以上 | ナデ | やや粗 | 橙 (5YR6/6) | 良 | 竪穴住居5 | 弥生後期～古墳前期 |
| 9 | 土器 | 壺 | 口径16.3 | 3.2以上 | ナデ、ハケ | やや粗 | 黒褐 (10YR3/1) | 良 | 竪穴住居5 | 弥生後期～古墳前期 |
| 10 | 土器 | 壺 | 底径5.4 | 4.3以上 | ナデ | やや粗 | 外面 にぶい褐 (7.5YR5/9) 内面 暗灰 (N3/0) | 良 | 竪穴住居5 | 弥生後期～古墳前期 |
| 11 | 土器 | 壺 | 底径6.5 | 2.2以上 | ナデ | やや粗 | 橙 (5YR6/6) | 良 | 竪穴住居5 | 弥生後期～古墳前期 |
| 12 | 土器 | 甕 | 口径16.0 | 10.3以上 | ナデ | やや粗 | にぶい橙 (7.5YR6/4) | 良 | 竪穴住居5 | 弥生後期～古墳前期 |
| 13 | 土器 | 甕 | 口径16.2 | 5.1以上 | ナデ | やや粗 | にぶい黄橙 (10YR7/3) | やや軟 | 竪穴住居5 | 弥生後期～古墳前期 |
| 14 | 土器 | 甕 | 口径15.8 | 2.8以上 | ナデ、ヨコナデ | やや粗 | 外面 橙 (5YR6/6) 内面 にぶい橙 (7.5YR7/3) | やや軟 | 竪穴住居5 | 弥生後期～古墳前期 |
| 15 | 土器 | 甕 | 口径21.2 | 2.6以上 | ナデ、ヨコナデ | やや粗 | 橙 (5YR6/6) | 良 | 竪穴住居5 | 弥生後期～古墳前期 |
| 16 | 土器 | 甕 | 口径18.0 底径2.3 | 24.9 | ナデ、ハケ、ケズリ | やや粗 | 褐灰 (7.5YR4/1) | 良 | 竪穴住居5 | 弥生後期～古墳前期 |
| 17 | 土器 | 高杯 | 口径21.1 | 4.5以上 | ナデ | やや粗 | 外面 橙 (5YR7/4) 内面 灰黄褐 (10YR4/2) | 軟 | 竪穴住居5 | 弥生後期～古墳前期 |
| 18 | 土器 | 高杯 | 口径20.7 | 3.4以上 | ナデ | やや粗 | 外面 灰白 (10YR8/2) 内面 橙 (2.5YR6/6) | 軟 | 竪穴住居5 | 弥生後期～古墳前期 |
| 19 | 土器 | 高杯 | 口径26.0 | 5.7以上 | ナデ | やや粗 | にぶい橙 (7.5YR7/3) | 軟 | 竪穴住居5 | 弥生後期～古墳前期 |
| 20 | 土器 | 高杯 | | 2.8以上 | ナデ | やや粗 | にぶい橙 (7.5YR7/3) | 軟 | 竪穴住居5 | 弥生後期～古墳前期 |
| 21 | 土器 | 高杯 | | 3.3以上 | ナデ | やや粗 | 外面 黒褐 (2.5YR3/1) 内面 淡赤橙 (2.5YR7/4) | 軟 | 竪穴住居5 | 弥生後期～古墳前期 |
| 22 | 土器 | 高杯 | | 2.9以上 | ナデ | やや粗 | にぶい橙 (7.5YR7/3) | 軟 | 竪穴住居5 | 弥生後期～古墳前期 |
| 23 | 土器 | 器台 | | 7.1以上 | ミガキ、ナデ | 密 | 外面 灰白 (2.5Y7/1) 内面 橙 (5YR7/6) | 良 | 竪穴住居5 | 弥生後期～古墳前期 |
| 24 | 土器 | 器台 | | 7.65以上 | ミガキ、ナデ | 密 | 淡赤橙 (2.5YR7/4) | 良 | 竪穴住居5 | 弥生後期～古墳前期 |
| 25 | 土器 | 器台 | 脚径14.1 | 10.1以上 | | やや粗 | にぶい黄橙 (10YR7/4) | やや軟 | 竪穴住居5 | 弥生後期～古墳前期 |
| 26 | 土器 | 壺 | 口径13.2 | 8.7以上 | ナデ | 密 | 灰黄 (2.5Y6/2) | やや軟 | 竪穴住居6 | 弥生後期～古墳前期 |
| 27 | 土器 | 壺 | 径1.6 | 厚み0.45 | 円形浮文 | 密 | 淡黄 (2.5Y8/3) | やや軟 | 竪穴住居6 | 弥生後期～古墳前期 |
| 28 | 土器 | 甕 | | 2.0以上 | | やや粗 | にぶい黄橙 (10YR7/3) | 軟 | 竪穴住居6 | 弥生後期～古墳前期 |
| 29 | 土器 | 甕 | | 9.85以上 | ハケ、タタキ、ナデ | やや粗 | 黒褐 (10YR3/2) | 軟 | 竪穴住居6 | 弥生後期～古墳前期 |
| 30 | 土器 | 甕 | 口径15.4 底径3.6 | 16.8 | ハケ、タタキ、ナデ | 密 | にぶい橙 (7.5YR6/4) | 良 | 竪穴住居6 | 弥生後期～古墳前期 |
| 31 | 土器 | 鉢 | 口径21.4 | 10.05以上 | | やや粗 | にぶい橙 (7.5YR7/4) | 軟 | 竪穴住居6 | 弥生後期～古墳前期 |
| 32 | 土器 | 高杯 | 口径23.0 | 7.9以上 | ミガキ | 密 | 橙 (5YR7/6) | やや軟 | 竪穴住居6 | 弥生後期～古墳前期 |
| 33 | 土器 | 高杯 | 脚径15.4 | 2.85以上 | ミガキ | 密 | にぶい橙 (7.5YR7/2) | 良 | 竪穴住居6 | 弥生後期～古墳前期 |

| 番号 | 器種 | 器形 | 口径 | 器高 | 調整 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 遺構名 | 時代 |
|----|-------|----|----------------|--------|------------|-----|--------------------------------------|-----|----------|-----------|
| 34 | 土器 | 器台 | 口径10.8 | 1.5以上 | | 密 | 橙(5YR6/6) | やや軟 | 竪穴住居6 | 弥生後期～古墳前期 |
| 35 | 土器 | 器台 | | 5.2以上 | ナデ | 密 | にぶい橙(5YR6/4) | やや軟 | 竪穴住居6 | 弥生後期～古墳前期 |
| 36 | 土器 | 器台 | 脚径13.2 | 1.8以上 | ミガキ、ナデ | 密 | にぶい黄橙(10YR6/4) | 良 | 竪穴住居6 | 弥生後期～古墳前期 |
| 37 | 土器 | 甕 | | 1.9以上 | 櫛描文2条 | 密 | 明赤褐(5YR5/6) | 良 | 土坑4 | 弥生後期～古墳前期 |
| 38 | 土器 | 高杯 | | 3.5以上 | | 密 | 浅黄(2.5Y7/4) | 良 | 土坑4 | 弥生後期～古墳前期 |
| 39 | 土器 | 高杯 | | 4.9以上 | | やや粗 | にぶい黄(2.5Y6/3) | 良 | 土坑4 | 弥生後期～古墳前期 |
| 40 | 土器 | 器台 | 口径12.1 | 1.6以上 | | 密 | 橙(5YR6/6) | 良 | 土坑4 | 弥生後期～古墳前期 |
| 41 | 土器 | 甕 | | 1.5以上 | ナデ、列点文 | やや粗 | にぶい橙(7.5YR6/4) | 良 | 竪穴住居6貯蔵穴 | 弥生後期～古墳前期 |
| 42 | 土器 | 甕 | | 1.75以上 | | やや粗 | 浅黄橙(10YR8/3) | 良 | 竪穴住居6貯蔵穴 | 弥生後期～古墳前期 |
| 43 | 土器 | 鉢 | | 2.45以上 | ハケ、波状文5条 | やや粗 | にぶい赤褐(5YR5/4) | 良 | 土坑5 | 弥生後期～古墳前期 |
| 44 | 土器 | 壺 | 底径5.3 | 3.6以上 | | やや粗 | にぶい黄橙(10YR7/3) | 良 | 土坑2 | 弥生後期～古墳前期 |
| 45 | 土器 | 器台 | 口径8.3 底径9.4 | 8.2 | | やや粗 | 浅黄橙(10YR8/3) | 良 | 土坑6 | 弥生後期～古墳前期 |
| 46 | 須恵器 | 杯 | | 2.25以上 | ナデ | 密 | 灰(N6/0) | 良 | 溝1 | 飛鳥 |
| 47 | 土器 | 甕 | | 3.0以上 | | やや粗 | 黄灰(2.5Y6/1) | 良 | 竪穴住居3上面 | 弥生後期～古墳前期 |
| 48 | 土器 | 甕 | | 1.8以上 | | やや粗 | 橙(5YR7/6) | 良 | 竪穴住居6上面 | 弥生後期～古墳前期 |
| 49 | 土器 | 甕 | 底径3.2 | 2.0以上 | | やや粗 | にぶい橙(7.5YR7/4) | 良 | 竪穴住居6上面 | 弥生後期～古墳前期 |
| 50 | 土器 | 高杯 | | 3.8以上 | | 密 | 外面 にぶい橙(5YR6/4) 内面 にぶい黄橙(10YR7/2) | 良 | 竪穴住居6上面 | 弥生後期～古墳前期 |
| 51 | 土器 | 高杯 | | 3.0以上 | | やや粗 | 外面 黄灰(2.5Y4/1) 内面 にぶい黄橙(10YR7/4) | やや軟 | 竪穴住居6上面 | 弥生後期～古墳前期 |
| 52 | 土器 | 高杯 | 口径19.2 | 6.85以上 | ミガキ | 密 | 外面 橙(5YR6/6) 内面 にぶい黄橙(10YR7/4) | 良 | 土坑4上面 | 弥生後期～古墳前期 |
| 53 | 土器 | 壺 | 頸径13.7 | 4.8以上 | ヨコナデ | やや粗 | 外面 橙(5YR7/6) 内面 灰(N4/0) | 良 | 黒褐色砂泥 | 弥生後期～古墳前期 |
| 54 | 土器 | 高杯 | 口径25.0 | 3.5以上 | | やや粗 | 外面 にぶい橙(7.5YR7/4) 内面 暗灰(N3/0) | 良 | 黒褐色砂泥 | 弥生後期～古墳前期 |
| 55 | 土器 | 壺 | | 2.7以上 | ヨコナデ | やや粗 | 橙(5YR6/6) | 良 | 黒褐色砂泥 | 弥生後期～古墳前期 |
| 56 | 土師器 | 皿 | | 1.1 | ナデ | 密 | 外面 明黄褐(10YR6/6) 内面 浅黄橙(10YR8/3) | 良 | 竪穴住居3上面 | 平安後期 |
| 57 | 土師器 | 皿 | | 1.6以上 | ヨコナデ、ナデ | 密 | にぶい橙(7.5YR7/4) | 良 | 竪穴住居3上面 | 江戸後期 |
| 58 | 土師器 | 皿 | 口径8.2 | 1.4 | ヨコナデ、ナデ | 密 | 灰白(10Y8/2) | 良 | 竪穴住居3上面 | 江戸後期 |
| 59 | 土師器 | 皿 | | 1.6 | ヨコナデ、ナデ | 密 | 浅黄橙(10YR8/4) | 良 | 竪穴住居3上面 | 江戸後期 |
| 60 | 土師器 | 皿 | 口径10.3 | 1.3 | ヨコナデ、ナデ | 密 | 外面 灰白(7.5YR8/2) 内面 黄橙(10YR8/6) | 良 | 竪穴住居3上面 | 江戸後期 |
| 61 | 土師器 | 皿 | | 1.2以上 | ユビオサエ、ヨコナデ | 密 | にぶい橙(7.5YR7/4) | 良 | 竪穴住居3上面 | 江戸後期 |
| 62 | 土師器 | 皿 | 口径11.6 | 1.5 | ヨコナデ、ナデ | 密 | 灰白(7.5Y8/2) | 良 | 竪穴住居3上面 | 江戸後期 |
| 63 | 土師質土器 | 塩壺 | 底径4.6 | 6.3以上 | ナデ、布目痕 | 密 | 明赤褐(2.5YR5/6) | 良 | 竪穴住居3上面 | 江戸後期 |
| 64 | 土師器 | 皿 | 口径4.3 | 1.1 | 未調整 | 密 | にぶい黄橙(10YR7/2) | 良 | 灰黄色砂泥 | 江戸後期 |
| 65 | 土師器 | 皿 | 口径5.2 | 1.55 | 未調整 | 密 | にぶい黄橙(10YR7/4) | 良 | 灰黄色砂泥 | 江戸後期 |
| 66 | 石器 | 石匙 | 縦3.9 横7.85 | 厚さ0.75 | | | | | 黒褐色砂泥 | 縄文前期 |

版 图

報 告 書 抄 録

| ふりがな | しょくぶつえんきたいせき | | | | | | | |
|------------------------|--|-------------------|-----------------|-------------------|--------------------|-------------------------------|---------------------|------------|
| 書名 | 植物園北遺跡 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 2007-1 | | | | | | | |
| 編著者名 | 平田 泰・モンペティ恭代 | | | | | | | |
| 編集機関 | 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 | | | | | | | |
| 所在地 | 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1 | | | | | | | |
| 発行所 | 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦2007年6月29日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| しょくぶつえんきたいせき 植物園北遺跡 | きょうとしききょうく 京都市左京区 しもがきたのがみちちょう 下鴨北野々神町 にじゅうばんち 20番地 | 26100 | 146 | 35度 03分 06秒 | 135度 46分 17秒 | 2007年1月 24日～2007 年4月27日 | 1,470m ² | 施設建設 工事 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 植物園北遺跡 | 集落跡 | 弥生時代後期～ 古墳時代前期 | 竪穴住居9棟、 土坑7基 | 土器 | | 縄文時代前期の石 匙が出土 | | |
| | | 飛鳥時代 | 溝 | 須恵器 | | | | |

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-1

植物園北遺跡

発行日 2007年6月29日

編集
発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961